

かみ はらん だ  
上 原 田 遺 跡

— 平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —



1995

財団法人山口県教育財団  
山口県教育委員会



## 序

近年、農業基盤整備事業等の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされる機会が増加してまいりました。

私たちの郷土山口を築いてきた先人たちの長い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした工事から保護し、併せて、開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりをめざして、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業施行予定地区に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

平成6年度は、楠町大字東吉部に所在する上原田遺跡の発掘調査を行い、当時の人々の生活文化の実態を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術研究や教育の資料に利用されることはもとより、広くふるさとづくりの基礎資料として活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、及び関係各位に対して、深甚なる謝意を表します。

平成7年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 高浜 哲

山口県教育委員会 教育長 高浜 哲

# 例 言

1 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成6年度に実施した上原田遺跡（山口県厚狭郡楠町大字東吉部所在）の発掘調査報告書である。

2 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会（山口県埋蔵文化財センター）

調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 白岡 太

井上広之

山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 西岡義貴

3 調査に当たっては、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、楠町経済課、楠町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

4 本書の第1図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「湯ノ口」を使用した。

5 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。

6 出土遺物のうち縄文土器については、山口大学人文学部教授 中村友博氏・山口県教育委員会文化課埋蔵文化財係長 乗安和二三氏の指導助言を得た。石器の一部について実測図化及び原稿執筆を山口県企画部県史編さん室専門研究員 河村吉行氏に依頼し、玉稿を賜った。磁器については、山口県立美術館学芸専門監 榎本徹氏の指導助言を得た。石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門研究員 亀谷敦氏に依頼した。なお石質鑑定は表面観察によるものである。

7 本書に使用した土色の色調の表記は、Munsell方式による。農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」による。

8 写真の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B：住居跡、建物跡 S K：土坑 S P：柱穴 S D：溝状遺構

10 本書の実測図・写真の作成及び本文の執筆に当たっては、白岡・井上・西岡が分担し、編集は白岡が行った。

## 本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 遺 構	4
縄文時代	4
室町時代	18
IV 遺 物	27
縄文時代	27
室町時代	42
V ま と め	47

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第15図 掘立柱建物実測図(1)	19
第2図 調査区設定図	3	第16図 掘立柱建物実測図(2)	20
第3図 S B01実測図	4	第17図 S K 045実測図	22
第4図 I地区遺構配置図	5	第18図 土坑実測図(3)	23
第5図 III地区遺構配置図	6	第19図 縄文土器(1)	30
第6図 II地区遺構配置図	7・8	第20図 縄文土器(2)	32
第7図 S B02実測図	10	第21図 打製石斧実測図	34
第8図 S B03実測図	11	第22図 石鏃実測図	36
第9図 S B04実測図	12	第23図 その他の石器実測図	38
第10図 住居状遺構実測図	13	第24図 I地区出土土器実測図	42
第11図 S K 075実測図	14	第25図 II地区出土土器実測図	44
第12図 土坑実測図(1)	15	第26図 土製品・石製品・金属製品実測図	46
第13図 土坑実測図(2)	16	第27図 縄文時代の上原田(想像図)	
第14図 S B07実測図	18		

## 写真目次

### 巻頭カラー

写真1	槍立森遺跡……………1	写真17	S B 11 (西から)……………21
写真2	荒滝城跡……………1	写真18	S K 045土器等出土状況(北から) ……22
写真3	S B 01土器等出土状況(北から) ……9	写真19	S K 114土器出土状況(北から) ……23
写真4	石鎌出土状況(西から)……………9	写真20	S K 045完掘(北から)……………24
写真5	縄文土器出土状況(北から)……………9	写真21	S K 114土器出土状況(南から) ……24
写真6	S B 02完掘(南から)……………10	写真22	S K 088土器等出土状況(東から) ……24
写真7	S B 03完掘(南から)……………11	写真23	縄文土器(1)……………31
写真8	S B 04(北から)……………12	写真24	縄文土器(2)……………33
写真9	住居状遺構完掘(東から)……………13	写真25	打製石斧……………35
写真10	11 S K 075土層……………14	写真26	石 鎌……………37
写真12	S K 075完掘(西から)……………17	写真27	その他の石器……………39
写真13	S K 109完掘(西から)……………17	写真28	I 地区出土土器……………43
写真14	S K 113完掘(南から)……………17	写真29	II 地区出土土器……………45
写真15	S B 05(西から)……………21	写真30	土製品・石製品・金属製品……………46
写真16	S B 07(西から)……………21		

## 図版目次

図版1	南上空から吉部盆地南部を見おろす (↓上原田遺跡) 調査区近景(東から)	図版3	調査前 重機による表土除去 遺構検出 遺構掘り込み 遺構実測 現地説明会
図版2	I・II・III地区全景	図版4	竪穴住居復元

## 表 目 次

第1・2表	土坑一覧表……………25・26	第4・5表	石器観察表……………40・41
第3表	縄文土器観察表……………28		

## I 遺跡の位置と環境

上原田遺跡は、厚狭郡楠町大字東吉部に所在する縄文時代晩期と室町時代の集落遺跡である。楠町は厚東川の中流域にあり、南部には有帆川が流れる。町域は北東から南西に向かって細長く、南北約16km、東西約8kmである。吉部盆地は本町の北部に立地し、中国山地の洪積世丘陵がしだいに低平になって緩斜面を形成する地域（長門残丘）に相当する。日ノ岳（標高458.6m）・荒滝山（標高459m）・岡山（408m）・笛太郎（386.6m）などを含む日ノ岳山地と、小起伏の厚東丘陵に囲まれた盆地である。笛太郎の東麓には国指定天然記念物の吉部の大岩郷があり、その奇景は美祿市万倉の大岩郷と並び有名である。本遺跡は盆地の南端部に位置し、厚東川支流の藤ヶ瀬川がつくる谷底平野と小坂から長谷にかけての低地の間に、舌状に張り出した形で残った比高15～20mの砂礫層からなる台地上にある。

周辺の遺跡としては、本遺跡の北東約1kmに位置する下市遺跡がある。平成5年度に発掘調査されたこの遺跡では、平安時代後半～江戸時代前半までの10棟の掘立柱建物跡や後述の内藤氏や埴生氏に関わると推定される屋敷跡（石組・集石遺構、井戸を含む）が確認されている。また、遺物包含層からはこれに先行する縄文土器（甕）・弥生土器・須恵器が出土しており、縄文時代～古墳時代にもこの地で人々が生活を営んでいたことを裏付けている。しかし、残念なことにその時代に伴う遺構は検出されなかった。吉部周辺には、発掘調査により縄文・弥生・古墳時代の遺構が確認された例はなく、周知の遺跡も希薄である。下市遺跡からはほぼ真北500mの位置には古墳時代の埋葬跡と考えられる植立森遺跡（写真1）がある。

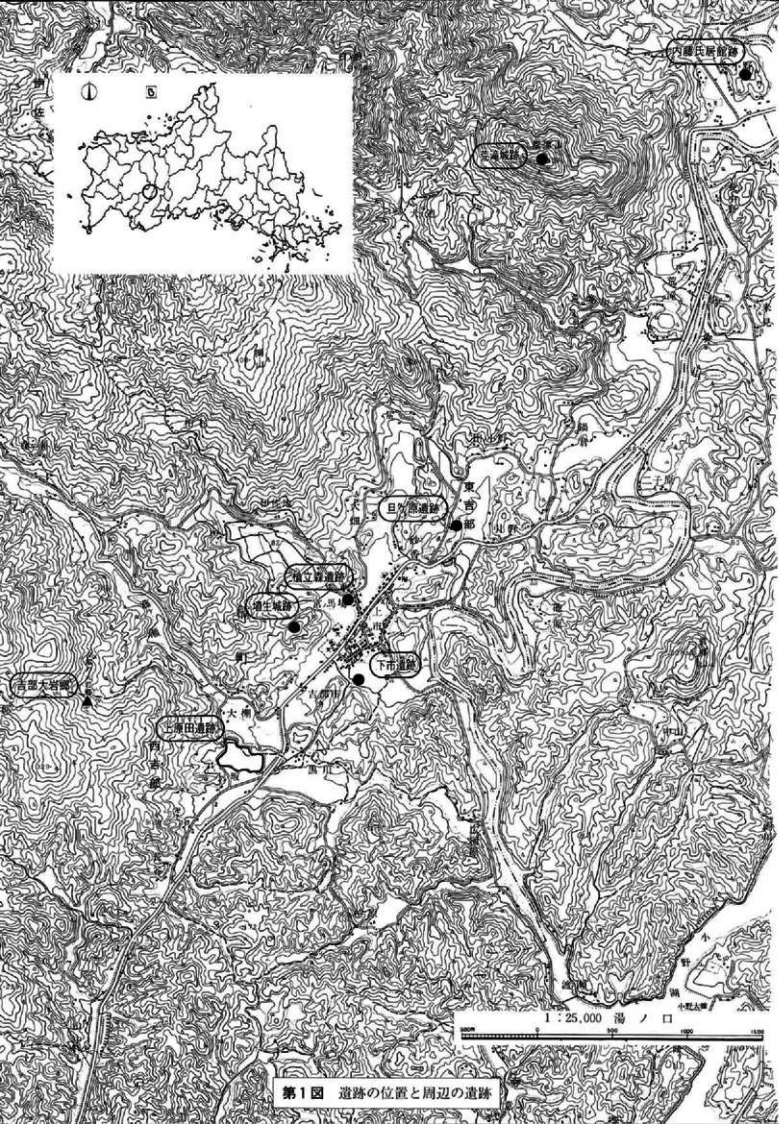
古代から中世にかけては厚東氏がこの地を治めることになる。吉部には、吉部寺や寺尾（吉部）八幡宮、神宮寺など厚東氏が創建・修築に関わったとされる寺社が多い。このうち吉部寺は堂が原山に創建されたと伝えられているが、その存在は確認されていない。14世紀後半になると大内氏が勢力を伸ばし、その後、家臣の内藤氏が歴代長門守護代を務めている。盆地の北部にそびえる荒滝山頂には、荒滝城跡（写真2）がある。16世紀半ばに守護代となった内藤隆春の居城で、40°近い急傾斜に囲まれた自然地形を利用した山城である。また、伝居館跡の石組みが東麓の今小野に残存し、「土居」「上屋敷」などの地名やかど名が伝えられている。一方、吉部市西方の埴生山にも内藤氏の重臣の山城跡が所在した可能性があるが、いずれも未発掘のため詳細は不明である。17世紀初頭、内藤氏が荒滝城から離脱した後は毛利氏の統治下におかれる。



写真1 植立森遺跡



写真2 荒滝城跡



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



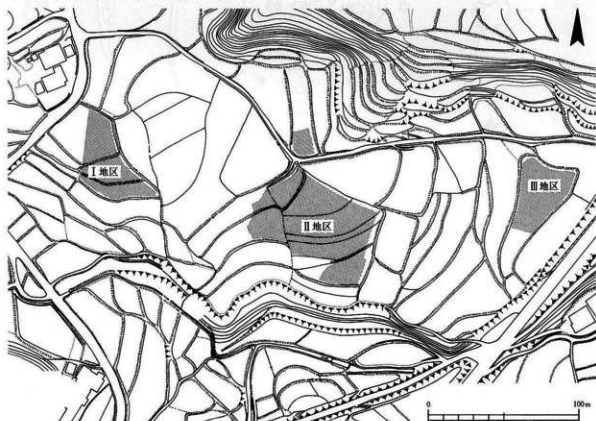
## II 調査の経緯と概要

山口県教育委員会では、ほ場整備事業地区内の埋蔵文化財保護を目的に、事業に先立って遺跡の分布調査を行っている。上原田遺跡は、これにより新たに発見された遺跡である。当教育委員会では農林部耕地課と協議を行い、盛土工法への設計変更など現状保存が困難な箇所について事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、山口県教育委員会は文化庁の国庫補助を受け、両機関合同で平成6年4月26日から現地での調査を開始した。

まず、対象地区内に12本のトレンチを設定して、遺構の広がりや分布密度等を把握し、計3地区について面的な発掘を行うことにした(第2図)。便宜上西からⅠ地区・Ⅱ地区・Ⅲ地区と仮称する。各地区とも全面にわたって中世の遺構の分布が見られた。各地区の基本的な層序は、上位より耕土・盤土・地山である。

つぎに、重機による表土除去を行った後、人力で丹念に遺構面を検出していった。この際各地区、特にⅡ地区から縄文土器片や石鎌が多く出土したため、より慎重に精査した。その結果、遺構の埋土は中世(灰褐色土)とは異質(褐色土)であることが確認され、これらが縄文時代のものである可能性が出てきた。最終的な発掘面積は7850㎡(Ⅰ地区1600㎡・Ⅱ地区5200㎡・Ⅲ地区1050㎡)に及ぶ。

遺構の掘り込みは、Ⅱ→Ⅰ→Ⅲ地区の順に規模の大きな遺構から掘り進めた。7・8月は猛暑にままわれ、炎天下での作業は肉体的な疲労度を強めたが、作業員の知恵と努力により克服していった。掘り込みが完了した遺構は、逐次写真撮影・実測により記録保存をはかった。調査の成果は、堅穴住居を復元して10月1日に現地説明会を開催したところ、約300名の見学者があった。その後国土座標を使って遺構全体の測量作業を行い、10月16日現地での作業を終了した。



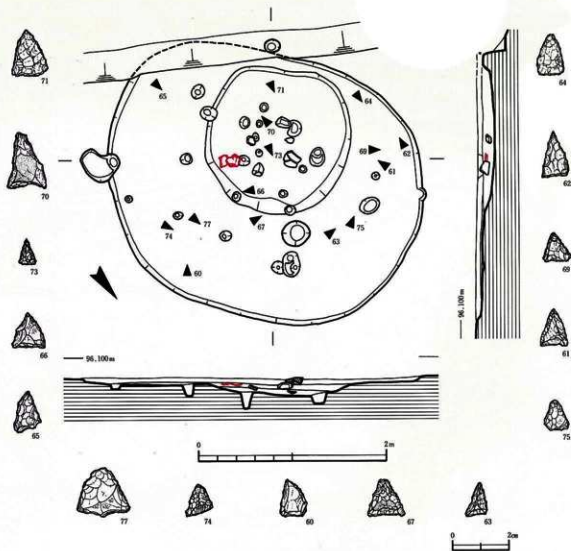
第2図 調査区設定図

### III 遺構

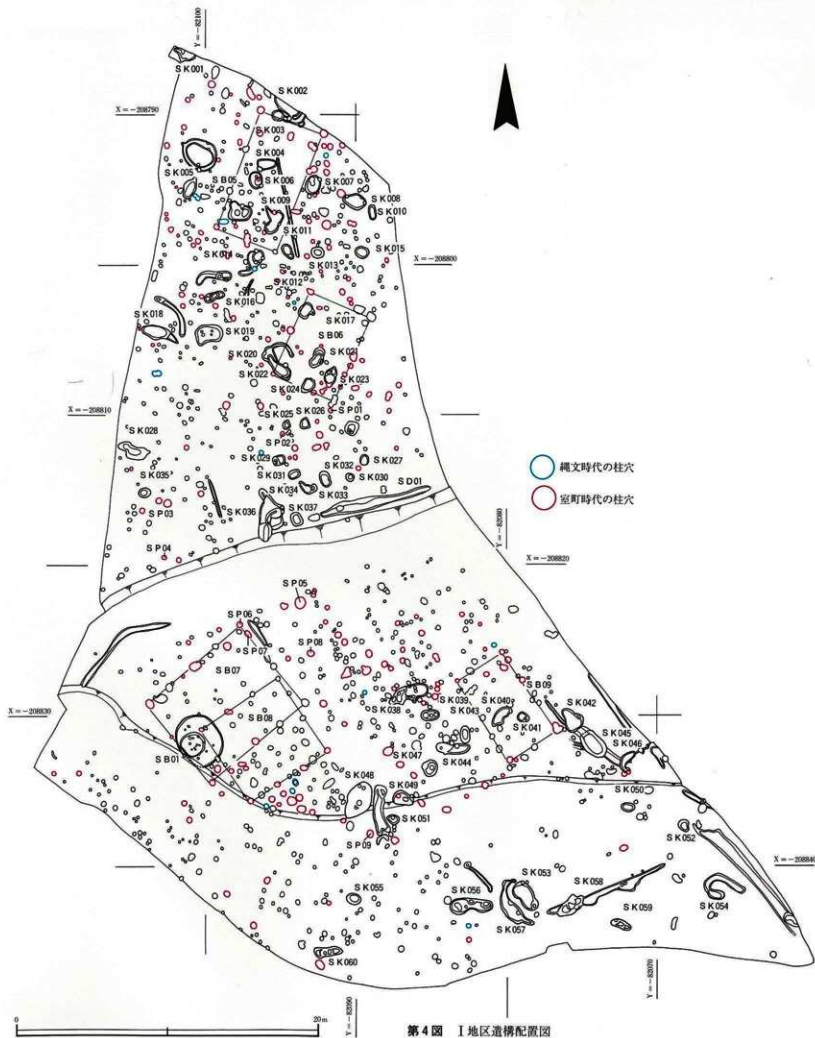
今回の発掘調査で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居4軒・住居状遺構1基・土坑39基・溝状遺構2条・柱穴多数、中世室町時代に属する掘立柱建物1棟・土坑27基・溝状遺構21状・柱穴多数がある。各遺構の上面は近世以降の水田開作により削平を受けており、遺存状況は全般的に良くない。

#### 縄文時代

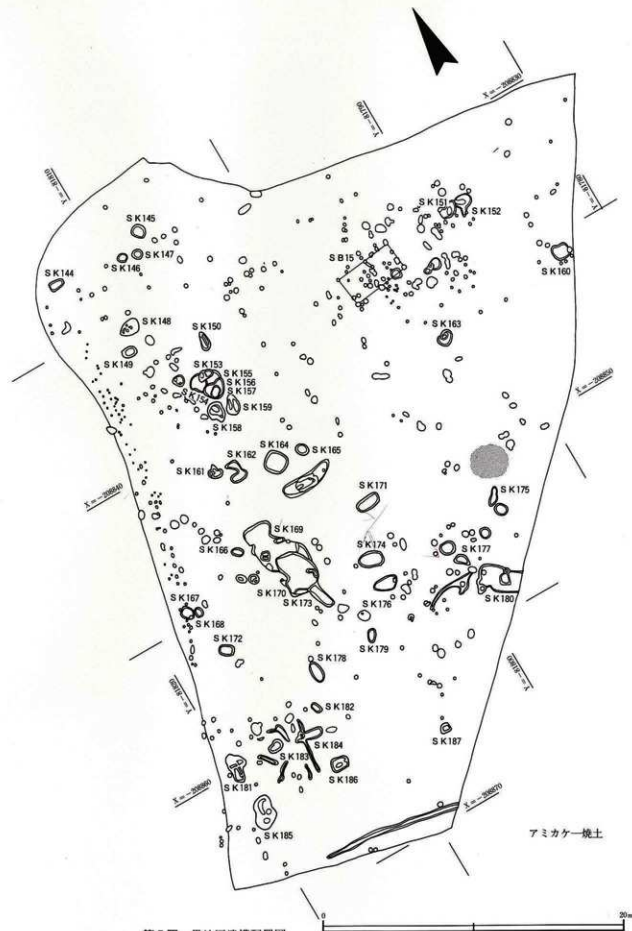
竪穴住居はI地区で1軒(SB01)、II地区で3軒(SB02~04)検出した。平面形は小規模な円形あるいは楕円形をなす。その基本構造は地面を浅く掘って床を造出し、柱をたててカヤ葺き屋根にしつらえたと推定されるが、いずれも炉跡をとどめず、屋外炉であったとみられる。他方、住居状遺構1基を含め、多数確認された同時代の柱穴について、後世の削平により上面消失した竪穴住居の遺存部分である可能性があるためその取り扱いに慎重を期したが、明確な判断資料を得るに至らなかった。土坑はほぼ全地区で検出し、規模・形状とも様々。遺存状況から貯蔵穴・不用品投棄穴など通例的な用途が想起されるが、墓や落とし穴を傍証するものは未検出である。Ⅲ地区では遺構分布が希薄となり、風倒木とみられる痕跡が顕著。遺物からこれらは縄文時代晩期を主体に営まれた集落関連遺構群であることと推定される。



第3図 SB01実測図



第4図 I地区遺構配置図



第5図 III地区遺構配置図

アメリカー焼土



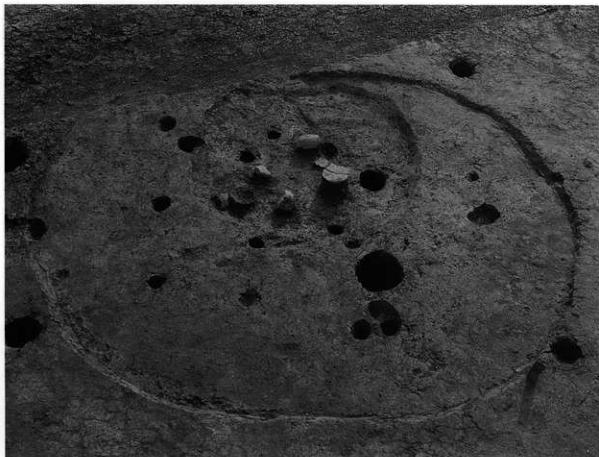


写真3 S B01土器等出土状況（北から）



写真4 石鏃出土状況

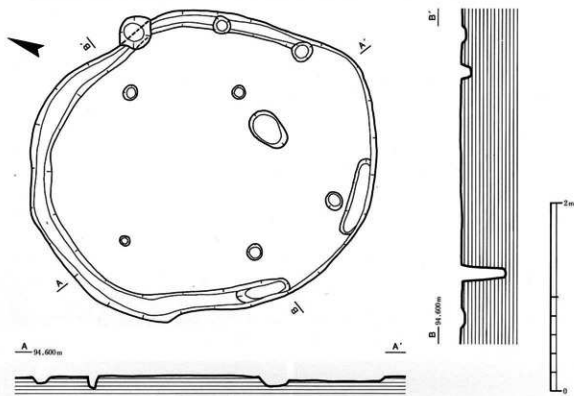


写真5 縄文土器出土状況

### 1 竪穴住居

S B01 I地区の中央部西寄りに位置する。上部を削平されているものの壁高約8cmを測り、本遺跡検出の竪穴住居中もっとも遺存状態が良い。埋土は褐色粘質土の単一土層。平面形は、北西-南東方向にやや長い楕円形。床面の南西側一部を欠失するが旧状は推計可能で、長軸345cm×短軸295cm、床面積約7㎡の規模となる。床面の中央部はさらに長軸167cm×短軸159cmの範囲を深さ約20cm凹地状に掘り下げている。主柱穴は壁に沿って6-7本が不均等な間隔で配置され、その内側に支柱とみられる小柱穴を数本確認した。遺物は床面全域から多量の石器（搔器・楔形石器・石鏃）と石材剥片、さらに中央凹地内で工作台に利用したとみられる人頭大の自然角礫3個と粗製深鉢片（縄文晩期）。これらの出土状況から、S B01は石器製造に係る工房的役割を担った遺構であるといえよう。

**SB02** II地区の東域に位置する。上部の大半を削平され、壁遺存高は約4cm。床面はほぼ全容をとどめる。平面形は北西-南東方向にやや長い楕円形。長軸376cm×短軸320cm、床面積約9㎡の規模である。埋土は黒褐色土の単一土層。主柱穴は5本。中央穴はその内側やや東寄りに穿たれているが、焼熱を受けた痕跡はない。床面はほぼ平坦で、周縁には壁面に沿う幅16~24cm、深さ5~13cmの周溝が巡る。周溝が途切れる南東方向に家屋の出入口があった可能性がある。出土遺物はない。

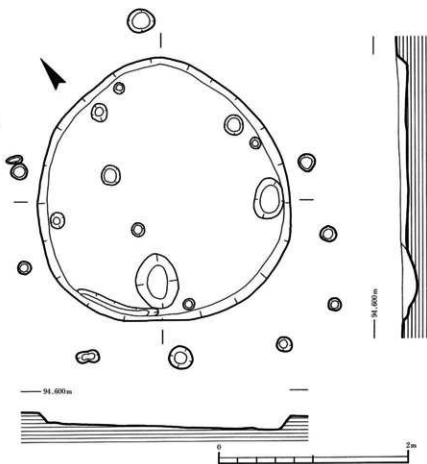


第7図 SB02実測図



写真6 SB02発掘（南から）

**S B03** II地区の中央部に位置する。平面形は円形。直径268~275cm、床面積約5㎡の規模で、壁の遺存高は約10cm。床面はほぼ平坦。その南西側に幅10cm、深さ4cmの周溝の一部が遺る。床面の2か所を中世の柱穴が貫いているが、主柱穴は壁に沿って不均等に配置された5本であると捉えられるよう。壁の外周には、屋根を支える小柱穴9本が確認できた。遺物は縄文晩期の精製浅鉢片と黒曜石チップで、床面上から出土。埋土にはふい褐色土の単一土層。後世の攪乱で地山土が部分的に混入。



第8図 S B03実測図

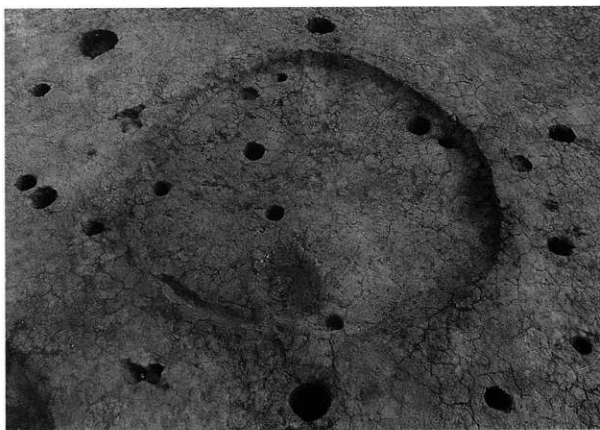
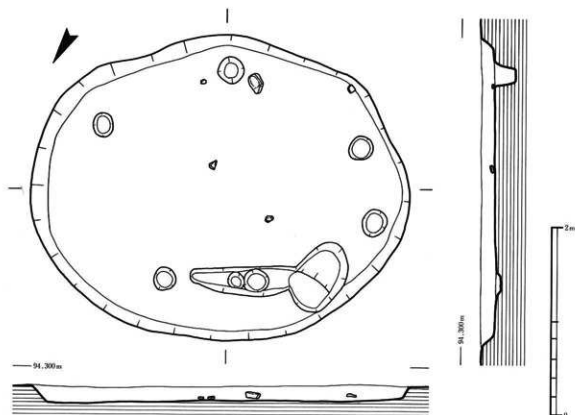


写真7 S B03完掘（南から）

**S B04** II地区の中央寄りで、S B03の南東方向約12mの位置にある。平面形は東-西方向にやや長い楕円形。長軸402cm×短軸324cm、床面積は約9㎡の規模。埋土は暗褐色粘質土の単一土層。壁の遺存高は13~18cmで、その内周に沿って6本の支柱穴が配置。床面の北西部に不整形の浅い掘り込みがあるが、用途などは不明。床面上から縄文晩期の粗製深鉢片、黒曜石と水晶のチップが出土。



第9図 S B04実測図

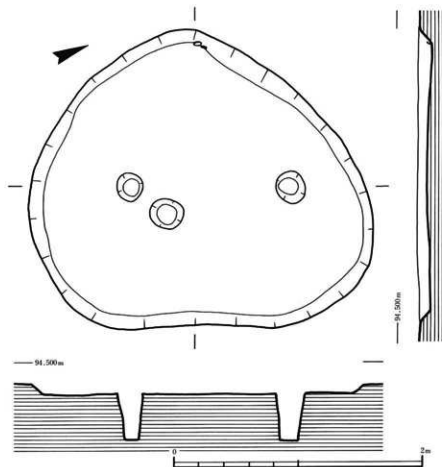


写真8 S B04



## 2 住居状遺構

S B 03の南西方向約7 mの位置にある。上部を削平されているが壁高16 cmを測り、遺存状況は比較的良好といえる。床面はほぼ平坦。平面形は不整形。長軸269cm×短軸236cm、床面積は約4 m<sup>2</sup>の規模である。埋土は暗褐色粘質土の単一土層。柱穴は3か所で確認した。配置などその検出状況から竪穴住居の範疇には含まず住居状遺構として捉えたが、その性格は不明。遺物は床面上北西隅部から縄文晩期の精製浅鉢片が出土。



第10図 住居状遺構実測図

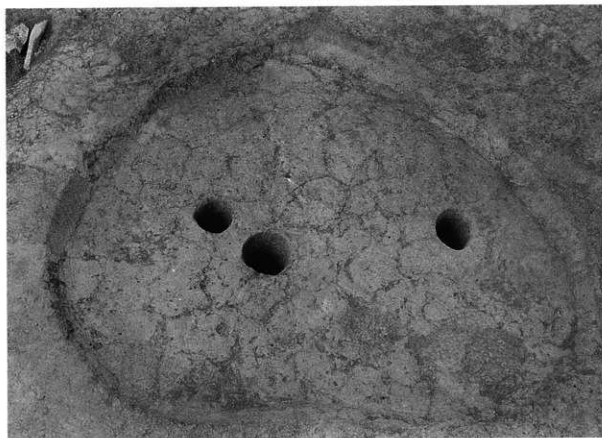


写真9 住居状遺構完掘（東から）

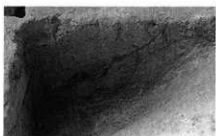
### 3 土坑

縄文時代晩期の土坑は39基（Ⅰ地区13基・Ⅱ地区25基・Ⅲ地区1基）検出したが、用途が明らかなものでは確認できなかった。平面形は、楕円・長円形が主流であるが、1/3は不整形を呈している。規模は、長軸で1～2mのものが半数を占め、2～3mのものがそれに次ぐ。深さは50cm以内のものが多く、総じて浅い。断面形は皿状をなすものが殆どである。以下代表的な土坑例を示すとともに、詳細については、表1・2にまとめた。

**SK075**（第11図・写真12） Ⅱ地区SB04の20m北に位置する。規模は長軸259cm・短軸159cm・最深部66cmで、南側は1段高くテラス状をなす。東壁面に2基のピットがみられ、炭化木や焼土塊が出土した。埋土は5層に分かれ、厚く堆積した焼土や炭化木がみとめられた。姫島産黒曜石のチップが出土した。

**SK109**（第12図・写真13） Ⅱ地区SB04の南側に位置する。南北に細長い長円形をなし、深さは102cmと深い。埋土は5層からなり、Ⅱ・Ⅲ層は焼土状に赤く強く締まっている。V層下部より粗製の縄文土器片2点出土した。

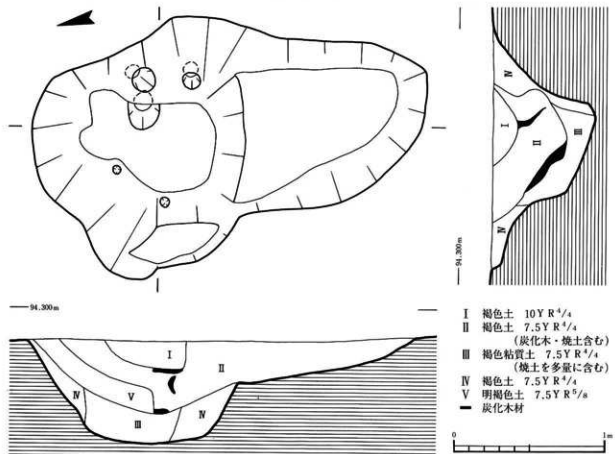
**SK113**（第12図・写真14） Ⅱ地区西端に位置する。底面にピットが2基認められる。埋土は3層からなり、Ⅱ層より精製の縄文土器細片、石英・チャートのチップが出土した。



東 写真10 西



北 写真11 SK075土層 南



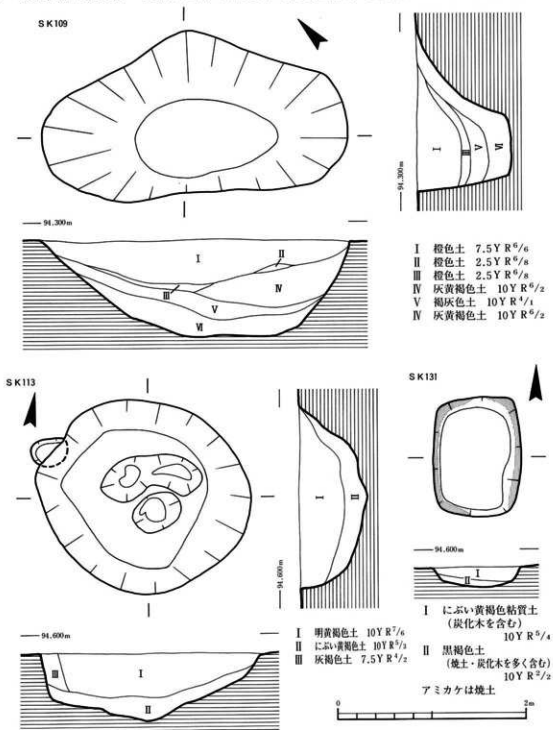
第11図 SK075実測図

S K 131 (第12図) II地区南側に位置する浅い皿状の土坑である。埋土は2層で炭化木や焼土を多く含む。壁面は高熱により強く焼け締まっている。2層上面より黒曜石とチャートのチップが出土。

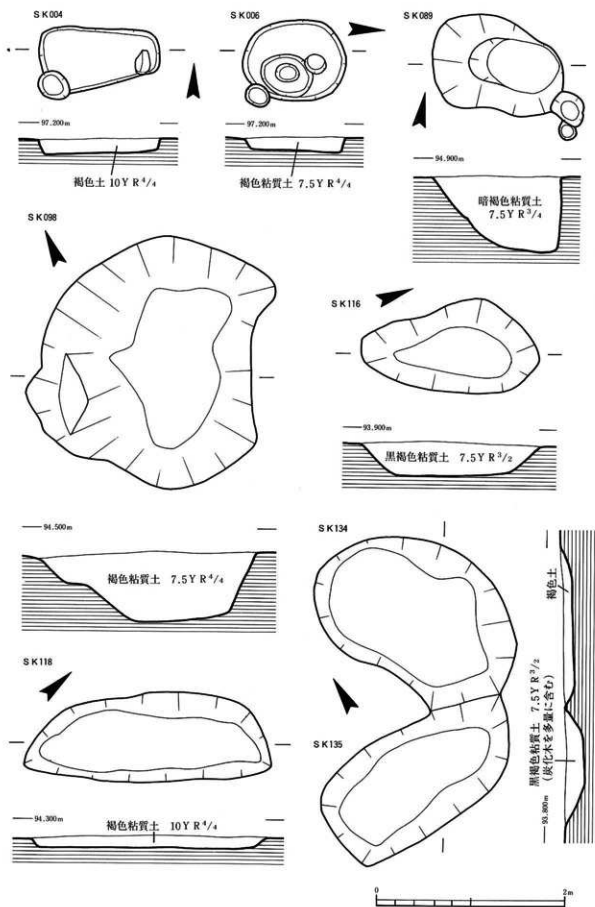
S K 004 (第13図) I地区北端に位置する。西辺の柱穴は後世のものである。断面形は、浅い皿状をなし、底面に縄文土器片(第19図・写真23の2)が貼り付いた状態で出土した。

S K 006 (第13図) I地区S K 004の南隣に位置する。底面及び南辺の柱穴は後世のものである。断面形は浅い皿状で、埋土下位より縄文土器片(第19図・写真23の3)を検出した。

S K 134・135 (第13図) II地区東端に位置し、ほぼ同時期のものとみられる。S K 134から縄文土器片・打製石斧(第21図・写真25の58)を、135から縄文土器片・黒曜石のチップを検出した。



第12図 土坑実測図(1)



第13図 土坑実測図(2)

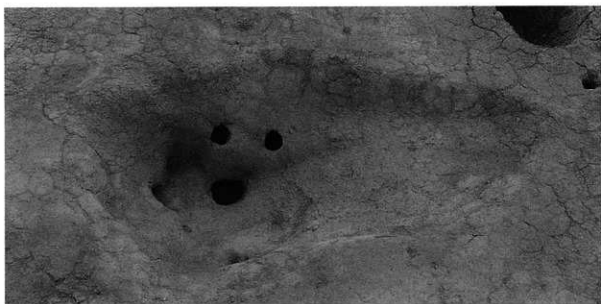


写真12 S K 075完掘 (西から)



写真13 S K 109完掘 (西から)



写真14 S K 113完掘 (南から)

## 室町時代

室町時代の遺構の分布を見ると、Ⅰ・Ⅲ地区は調査区全般にわたっているが、Ⅱ地区は西側と南東域に集中して見られる。掘立柱建物は棟方向から2グループに分けられるが、支柱穴埋土からの出土遺物により、概ね15～16世紀にかけての建物と推定される。また土坑は出土遺物から、掘立柱建物と同時期のものと14世紀のものに分けられる。

### 1 掘立柱建物（第14・15・16図、写真17）

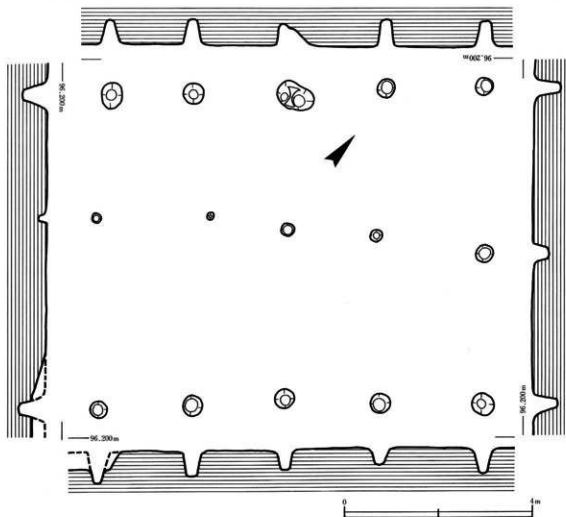
**S B07** Ⅰ地区中央寄りに位置する4間×2間の建物である。桁行長は8.1m、梁行長は6.6mの規模の大きい建物である。棟方向はN50°E。柱穴（S P06）から土師器の皿片や瓦質土器が出土した。

**S B05** Ⅰ地区北側に位置する3間×2間の建物である。桁行長は8.2m、梁行長は4.5mの規模の大きい建物である。棟方向はN20°E。柱間距離は桁方向で2.8m、梁方向で2.3mを測る。

**S B06** S B05の南側に位置する2間×1間の建物である。桁行長は6.0m、梁行長は4.4m。棟方向はN25°E。柱間距離は桁方向で3.0m、梁方向で4.4mを測る。

**S B10** Ⅱ地区西側中央寄りに位置する2間×1間の建物である。桁行長は4.5m、梁行長は3.2m。棟方向はN45°E。柱間距離は桁方向で2.2～2.4m、梁方向で3.2mを測る。

**S B09** Ⅰ地区東側に位置する3間×2間の建物である。桁行長は6.4m、梁行長は3.6m。棟方向は

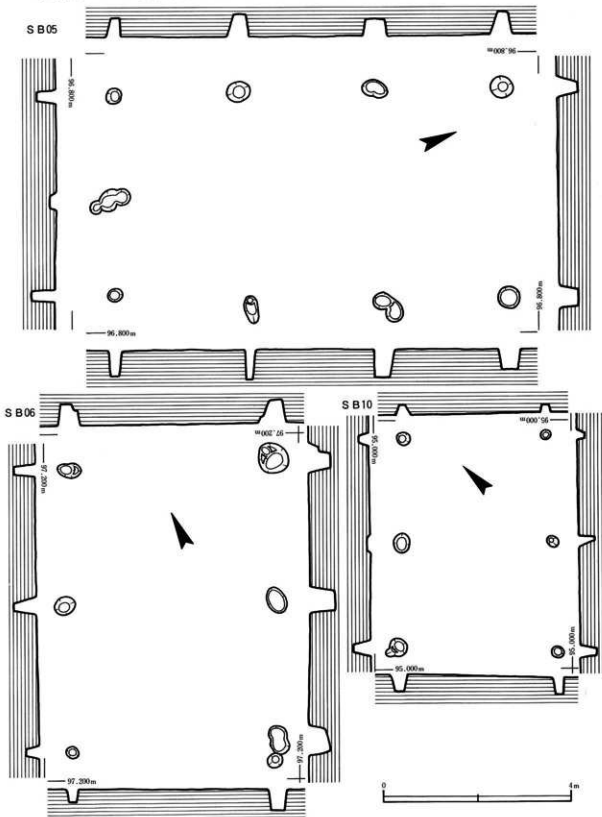


第14図 S B07実測図

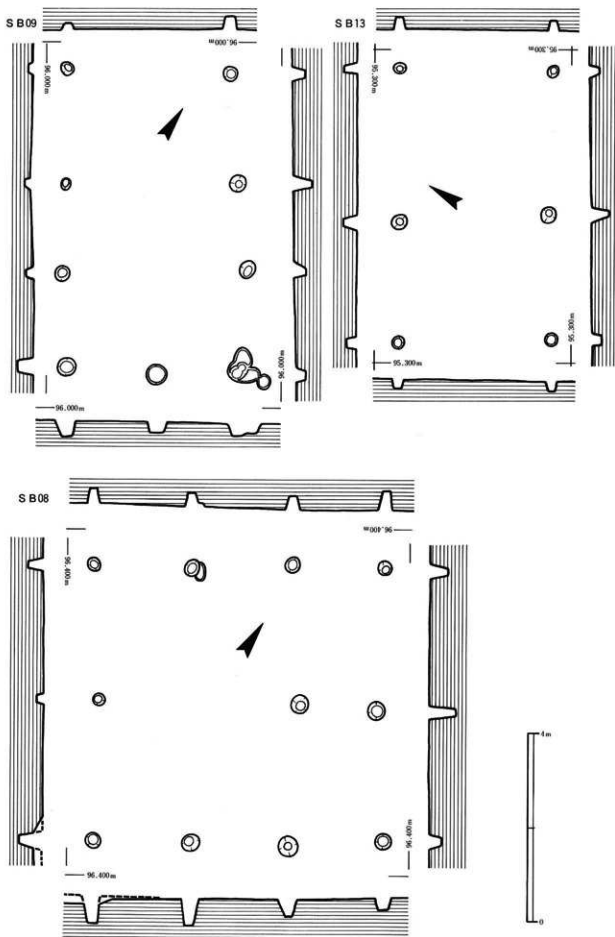
N35°W。柱間距離は桁方向で1.8~2.4m、梁方向で1.8mを測る。

**SB13** SB10の東側、SB11に隣接する2間×1間の建物である。桁行長は5.7m、梁行長は3.2m。棟方向はN60°E。柱間距離は桁方向で2.6~3.2m、梁方向で3.2mを測る。

**SB08** I地区中央の西寄り、SB07と重複する位置にある3間×2間の建物である。桁行長は6.0m、梁行長は5.8m。棟方向はN55°E。柱間距離は桁方向で2.0m、梁方向で2.8~3.0mを測る。



第15図 掘立柱建物実測図(1)



第16图 掘立柱建物实测图(2)





写真15 S B05 (西から)



写真16 S B07 (西から)



写真17 S B11 (西から)

## 2 土坑 (第17・18図、写真22)

**SK045** I地区南東側、S B09の南東2mに位置する。平面形は長円形、規模は長軸208cm、短軸178cm、深さ19cmである。瓦質鍋片(第24図・写真28の154)、土師質こね鉢片(第24図・写真28の155)、青磁片、土師器片、および鉄釘(第26図・写真30の183)が出土した。掘立柱建物と同時期のものと考えられるが、土坑の性格は不明である。

**SK114** II地区西側やや中央寄りに位置する。平面形は隅丸長円形、規模は本遺跡最大で長軸311cm、短軸178cm、深さ29cmである。土師器の坏(第25図・写真29の158、第25図の160)や皿(第25図・写真29の162、163)、瓦質鍋・土師質こね鉢・足鍋の細片、スラグなどが出土した。遺構の規模・形状や遺物の出土状況からみて、室町時代初期(14世紀)の土坑墓の可能性はある。

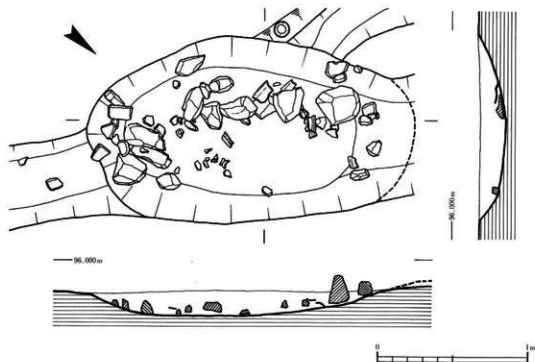
**SK123** II地区西側、SK114の南西4mに位置する。平面形は隅丸長円形、規模は長軸200cm、短軸142cm、深さ24cmである。土師器の皿(第25図・写真29の164)、瓦質鍋片、瓦質搦鉢片が出土した。遺物の出土状況からみて、この土坑もSK114と同時期の土坑墓の可能性はある。

**SK088** II地区の西端、S B14の北西4mに位置する。平面形は隅丸長円形、規模は長軸204cm、短軸165cm、深さ24cmである。土師器の坏(第25図・写真29の159)、瓦質土器片、輪羽口片(第26図・写真30の180)、スラグが出土した。時期は14世紀と推定される。

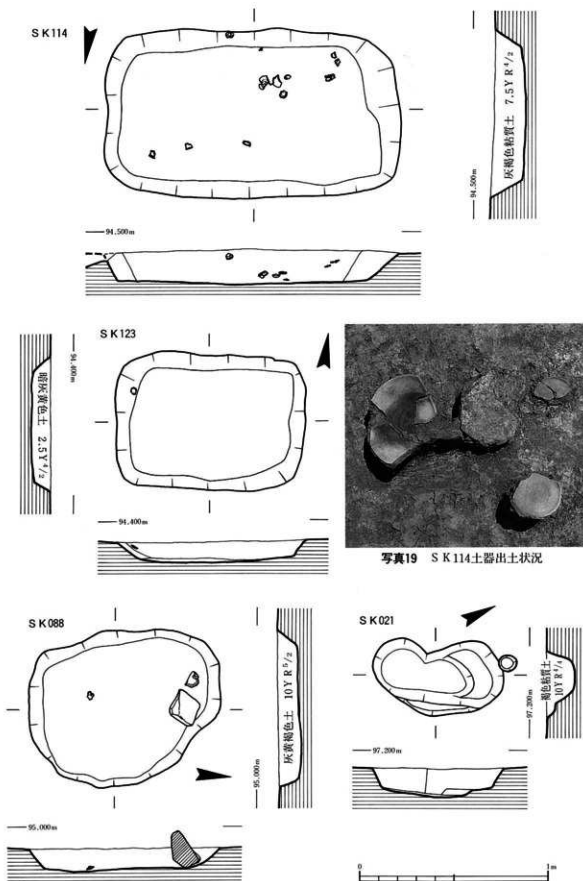
**SK021** I地区北側中央寄り、S B06と重複する位置にある。平面形は不整長円形、規模は長軸142cm、短軸70cm、深さ29cmである。瓦質土器・土師質土鍋・土師器皿の細片が出土した。15～16世紀のものとして推定される。



写真18 SK045土器等出土状況



第17図 SK045実測図



第18図 土坑実測図(3)

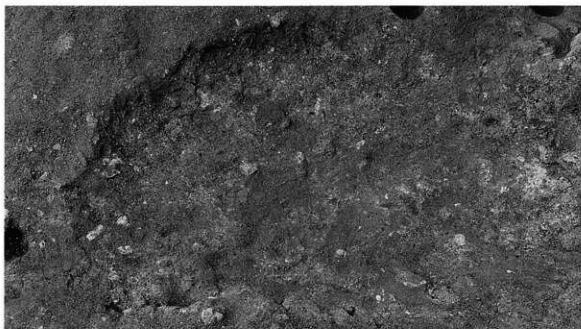


写真20 S K 045完掘（北から）



写真21 S K 114土器出土状況

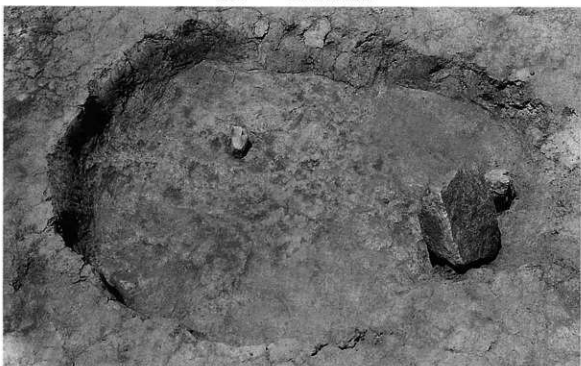


写真22 S K 088土器等出土状況

## I地区

番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期
		長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ		
001	不整長円形	15.2	—	2.4			048	楕円形	2.7	1.63	1.09	縄文土器片、 磨石並に燧石チップ	縄文時代晩期
002	長円形	19.2	—	1.9	土師器片、瓦質陶	室町時代	049	楕円形	—	9.6	2.7	縄文土器片	縄文時代晩期
003	楕円形	8.2	6.8	3.3			050	楕円形	8.7	5.7	1.3		
004	長円形	12.8	6.8	1.7	縄文土器片	縄文時代晩期	051	楕円形	9.0	7.2	1.5		
005	長円形	14.2	9.0	4.1			052	不整円形	8.0	7.8	1.7	土師器片	室町時代
006	長円形	11.0	8.6	1.6	縄文土器片	縄文時代晩期	053	楕円形	2.07	1.17	8		
007	楕円形	12.4	9.8	1.8	縄文土器片	縄文時代晩期	054	楕円形	10.5	6.2	1.6		
008	楕円形	16.1	10.6	1.1	縄文土器片、磨石並に燧石・ チャートチップ	縄文時代晩期	055	楕円形	8.6	7.0	5.7		
009	不整形	15.8	11.6	1.1			056	不整長円形	2.69	1.06	2.5	縄文土器片	縄文時代晩期
010	長円形	9.4	4.2	1.6	土師器器片、瓦質陶片	室町時代	057	不整長円形	2.84	1.04	2.3	打製石斧	
011	長円形	16.4	7.6	2.6	縄文土器片	縄文時代晩期	058	不整長円形	2.03	9.6	5.4	縄文土器片、 磨石並に燧石チップ	縄文時代晩期
012	長円形	10.6	6.4	3.9			059	不整長円形	1.49	4.9	2.1		
013	円形	8.4	7.2	4.9	土師器片・瓦質陶片	室町時代	060	長円形	18.1	5.0	3.1		
014	楕円形	—	9.6	2.5			II地区						
015	楕円形	8.8	8.0	1.2	土師器片	室町時代	061	不整円形	12.0	12.0	4.2		
016	長円形	14.4	6.2	1.5	縄文土器片	縄文時代晩期	062	隅丸長方形	13.8	1.02	1.5		
017	楕円形	10.6	7.0	3.7	土師器片、瓦質陶片	室町時代	063	隅丸長方形	12.8	1.24	2.6		
018	不整長円形	2.74	10.6	2.2	縄文土器片	縄文時代晩期	064	楕円形	8.0	4.1	3.4		
019	隅丸長方形	18.0	10.6	2.9	縄文土器片、 磨石並に燧石チップ	縄文時代晩期	065	楕円形	14.1	8.5	5.8	縄文土器片、石函、 磨石チップ	縄文時代晩期
020	不整長円形	25.6	7.4	8	土師器器片、瓦質陶片	室町時代	066	楕円形	14.0	6.0	2.2		
021	不整長円形	14.2	7.0	2.9	土師器器片、土師器片 瓦質土器片	室町時代	067	不整長円形	2.72	1.40	3.3		
022	長円形	19.2	6.8	4.2	土師器片	室町時代	068	長円形	10.8	4.8	5.6		
023	不整長円形	14.8	7.8	3.7	瓦質土器片	室町時代	069	円形	9.0	8.5	2.0		
024	不整長円形	10.0	7.4	1.9	土師器器片、土師器片、 瓦質土器片	室町時代	070	楕円形	8.9	7.2	3.5		
025	楕円形	6.7	5.5	1.1	土師器器片、土師器片、 瓦質土器片	室町時代	071	楕円形	11.8	8.6	2.8		
026	楕円形	7.8	6.5	2.3	土師器片、瓦質土器片	室町時代	072	不整形	12.8	10.3	1.5		
027	隅丸長方形	9.8	8.0	1.1	土師器片、瓦質土器片	室町時代	073	不整長円形	1.58	9.2	2.7	縄文土器片	縄文時代晩期
028	不整形	21.4	8.4	5.7			074	楕円形	14.1	7.4	3.9		
029	隅丸長方形	7.6	6.4	1.6	縄文土器片	縄文時代晩期	075	不整長円形	2.59	15.9	6.6	磨石チップ	縄文時代晩期
030	楕円形	6.8	5.6	8			076	楕円形	12.0	8.3	11.6		
031	楕円形	8.4	6.0	2.3			077	楕円形	15.2	8.7	5.0		
032	楕円形	7.6	—	1.6	土師器器片、瓦質土器片	室町時代	078	円形	8.2	7.4	5.2		
033	楕円形	5.6	4.5	1.4			079	長円形	10.4	5.2	1.1	瓦質土器片	室町時代
034	楕円形	8.0	5.4	1.9			080	楕円形	11.4	6.0	2.0	本品チップ	
035	楕円形	8.0	6.2	8.5			081	楕円形	16.5	9.4	6.5		
036	不整形	—	1.56	2.1	土師器片、瓦質足跡片、 燧石燧片		082	楕円形	7.8	6.8	3.9	縄文土器片	縄文時代晩期
037	隅丸長方形	9.4	7.9	2.4	土師器片、瓦質足跡片		083	楕円形	10.6	8.4	3.8		
038	不整形	15.3	8.8	3.4			084	楕円形	12.0	9.0	2.2		
039	楕円形	12.0	7.0	3.2			085	楕円形	12.1	9.7	6.6	縄文土器片、 磨石並に燧石チップ	縄文時代晩期
040	不整長円形	16.4	6.5	1.3			086	楕円形	13.1	9.2	5.8	縄文土器片、 磨石並に燧石チップ	縄文時代晩期
041	楕円形	8.2	6.2	1.1			087	不整長円形	13.2	10.5	3.1	縄文土器片、磨石チップ ブロンズ	縄文時代晩期
042	不整長円形	16.1	11.5	1.6	瓦質土器片	室町時代	088	隅丸長方形	2.04	16.5	2.4	土師器の灰、瓦質土器片、 燧石燧片、スラグ	室町時代
043	楕円形	11.3	6.3	4.3			089	不整長円形	13.8	9.8	8.0	縄文土器片	縄文時代晩期
044	長円形	21.8	6.0	1.7	土師器片	室町時代	090	楕円形	—	12.6	2.0		
045	長円形	29.8	12.0	1.9	土師器片、瓦質足跡片、 燧石燧片、青銅片、鉄片	室町時代	091	楕円形	14.4	10.0	8	縄文土器片	縄文時代晩期
046	長円形	13.0	5.5	2.7	土師器片、瓦質足跡片、 燧石燧片、石函	室町時代	092	長円形	10.3	4.4	4.8		
047	円形	10.7	8.0	2.1			093	不整長円形	21.2	6.2	4.1		

第1表 土坑一覽表(1)

番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期
		長軸	短軸	高さ		
094	不整長円形	2.20	1.04	5.0		
095	長円形	1.22	0.3	2.0		
096	楕円形	9.0	6.2	2.2	縄文土器片	縄文時代前期
097	—	14.5	6.9	4.8		
098	不整円形	2.86	2.53	7.5	縄文土器片、空堀石+チャップ	縄文時代前期
099	楕円形	1.34	1.00	4.6		
100	円形	1.12	1.01	2.3		
101	不整形	1.96	0.5	2.5		
102	不整長円形	1.71	0.6	5.8	土師器片、瓦質陶片	室町時代
103	楕円形	1.62	0.5	4.5		
104	楕円形	1.75	1.04	4.3		
105	楕円形	1.24	0.8	3.6		
106	不整形	3.32	2.30	2.0		
107	円形	1.59	1.56	1.1		
108	楕円形	1.20	0.70	4.8		
109	長円形	3.28	1.70	10.2	縄文土器片	縄文時代前期
110	楕円形	1.25	0.4	1.2		
111	楕円形	1.16	0.8	2.2		
112	楕円形	1.06	0.3	3.8		
113	楕円形	2.27	2.03	7.1	縄文土器片、土師器+チャートチップ	縄文時代前期
114	縄丸長方形	3.11	1.78	2.9	土師器片、瓦質陶片、スラグ	室町時代
115	楕円形	1.22	0.9	1.2	縄文土器片	縄文時代前期
116	長円形	1.98	1.00	3.4	石版	縄文時代前期
117	不整長円形	1.36	0.9	1.5		
118	長円形	2.52	0.5	1.2	縄文土器片	縄文時代前期
119	楕円形	1.04	0.5	1.1		
120	楕円形	0.5	0.3	2.1		
121	楕円形	1.18	0.8	1.1		
122	楕円形	1.66	1.05	7		
123	縄丸長方形	3.00	1.42	2.4	土師器片、瓦質陶片	室町時代
124	楕円形	1.88	1.15	1.0		
125	楕円形	1.18	0.6	2.2		
126	楕円形	1.63	1.32	1.6		
127	不整形	2.98	1.24	9.6	縄文土器片	縄文時代前期
128	不整長円形	1.80	1.04	6.9	縄文土器片	縄文時代前期
129	円形	6.8	6.1	1.4		
130	不整円形	9.9	9.0	1.3		
131	縄丸長方形	1.29	0.2	2.1	空堀石+チャートチップ	縄文時代前期
132	長円形	1.56	0.5	3.1		
133	長円形	2.45	1.15	7.9	縄文土器片	縄文時代前期
134	楕円形	2.26	1.45	1.3	縄文土器片、打製石斧	縄文時代前期
135	楕円形	2.20	1.14	1.8	縄文土器片、空堀石+チャップ	縄文時代前期
136	不整形	2.10	1.50	1.5		
137	楕円形	2.16	1.70	1.4	石版	縄文時代前期
138	不整長円形	2.30	0.5	3.6		
139	不整長円形	1.90	1.05	4.0	縄文土器片	縄文時代前期
140	不整長円形	1.20	0.70	3.3	縄文土器片、磨石+土師器片	縄文時代前期
141	楕円形	1.13	0.2	8		

番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期
		長軸	短軸	高さ		
142	長円形	16.9	7.3	1.4		
143	長円形	17.0	9.8	4.9		

田地区

144	縄丸長方形	9.4	5.8	1.6		
145	円形	9.3	9.1	1.3		
146	円形	6.7	6.0	1.2		
147	円形	6.8	6.7	1.9		
148	楕円形	14.1	9.6	3.4		
149	楕円形	9.5	7.3	9		
150	楕円形	12.6	0.1	2.0		
151	不整長円形	13.5	0.8	1.0		
152	不整円形	11.2	9.8	1.1		
153	不整長円形	11.1	5.4	3.7		
154	不整形	13.4	1.12	1.0		
155	不整形	10.2	—	1.5		
156	不整形	15.5	13.0	2.2		
157	不整長円形	5.7	4.3	1.9		
158	不整円形	13.7	12.3	3.0		
159	楕円形	13.5	8.2	3.6		
160	楕円形	11.6	10.0	5	石版	縄文時代前期
161	不整形	9.7	9.2	2.1		
162	不整形	14.1	12.6	1.7		
163	不整円形	11.1	9.6	2.2		
164	縄丸長方形	14.8	13.6	2.4		
165	楕円形	8.8	6.4	1.7		
166	楕円形	7.8	5.3	1.1		
167	楕円形	8.8	7.2	2.8		
168	楕円形	6.6	5.3	5		
169	不整形	5.70	2.60	7	土師器片	室町時代
170	不整形	3.04	2.30	1.1		
171	長円形	16.4	8.0	1.2		
172	縄丸長方形	9.7	8.8	3.3		
173	長円形	18.3	6.8	1.6		
174	楕円形	17.3	10.6	3.4		
175	楕円形	13.1	4.0	1.1		
176	楕円形	18.2	9.6	1.4		
177	不整長円形	19.3	5.8	1.5		
178	楕円形	15.0	6.9	1.4		
179	縄丸長方形	9.2	5.2	1.7		
180	縄丸長方形	—	1.66	1.1		
181	不整形	2.05	1.22	4.0	瓦質土器片	室町時代
182	縄丸長方形	7.8	4.1	1.0		
183	楕円形	10.0	6.0	1.0		
184	長円形	19.0	5.5	1.4		
185	不整長円形	2.28	1.32	4.3		
186	縄丸長方形	11.8	8.4	2.0		
187	縄丸長方形	6.2	6.0	2.5		

第2表 土坑一覧表(2)

## IV 遺物

出土遺物は、縄文時代の土器・石器、室町時代の土器・磁器・土製品・鉄製品・銅銭などである。このうち縄文時代の遺物の多くは遺構検出作業時に表面採集（表採）し、その他は各時代の遺構から出土したものである。以下、時代別に主要遺物の概要を記し、第3～5表で本稿の欠を補いたい。

### 縄文時代

発掘調査地区のほぼ全域から、縄文時代早～前期及び晩期の土器片が出土した。量的には胴部～口縁部の破片が多く、底部片は数点含まれるに過ぎない。総じて遺りは良くなく、調整など詳細不明のものが少なくない。土器以外には台形椀石器・石匙・石鎌・搔器・楔形石器、石斧・石鏃など多様な石器類があり、周辺一帯に当時の生活の場が展開していたことを裏付けている。

#### 1 縄文土器（第19・20図、写真23・24、第3表）

出土した縄文土器は、早～前期のもの（24・25）以外、大半が晩期に属する浅鉢・深鉢で占められる。24は早期の深鉢で、胴部外面に燃糸文。25はD字形の爪形を垂直に押し当てて施文した前期の爪形文土器。調整は内面磨研であるが、外面に条痕はみとめられない。

晩期の土器は、内外面磨研の精製土器と条痕調整の粗製土器に大別できる。精製土器は胴部中位で内折しながら外反し、さらに外上方に開いて短く立ち上がる口縁部へと至り、口縁端部を丸くおさめる浅鉢形が多い。粗製土器は胴部上位で内側に曲折した後に緩く外反させて立ち上がり、口縁部に緩く深鉢形が主体をなす。4・9は、外面に弧条沈線が巡る粗製の深鉢。15は精製の浅鉢で、波状口縁の外周に沿って2条の沈線が巡る。17・18は、同一個体の粗製深鉢。調整は内面ナデ、外面に条痕をとどめる。焼熱を受けて赤褐色を呈する。20は粗製の深鉢で、条痕調整上をナデで消している。22は凸帯状にやや厚く作った胴部の上位外面に、巻貝で横方向に施文。26・27・30・31は胴部が外反して立ち上がり、口縁部に凹線が入る晩期前半の浅鉢。34はこれより若干時期が新しくなる浅鉢で、胴部最大径となる部位。32は精製の浅鉢。波状口縁の外周に1条の沈線が走り、底部は丸底となるもの。33は浅鉢の頸部片で、外面ナデ調整。底部は平底（46）と上げ底（23・47・48）がある。45は粗製の深鉢。底部を欠失するが、凹底となるタイプである。

#### 2 石器（第21～23図、写真25～27、第4・5表）

表採を含めてⅠ～Ⅲ地区の全域から出土。伴出土器から、大半は晩期の所産とみて大過なからう。**打製石斧** いずれも扁平打製石斧で、Ⅰ～Ⅲ地区のほぼ全域で出土。総数は13点で、大半が折損品である。刃部にわずかに使用の痕跡（磨耗）が観察されるものの、着柄の状況を示唆する擦痕は確認できない。形態は、基本的に短冊形。石材は塩基性片岩と泥質片岩の2種類がある。**石鏃** 折損品や細片を含め出土総数は78点で、すべて打製石鏃。石材は安山岩と黒曜石の占める割合が多く、他に赤色頁岩・玄武岩・凝灰岩・珪長岩・砂岩・泥岩・水品などがある。このうち安山岩の多くはサヌカイトで、黒曜石には腰岳産と姫島産がある。形態は無茎式で、基部の形状を指準にして凹基式と平基式に分類できよう。凹基式の範疇に含めたもので特に注目すべきは、逆刺部両端を短く外反させて仕上げた形態のもの（88・93・95・97・110・112）である。石材にサヌカイトを用いて微細丁寧に整形調整されており、刺撃機能優先の動物狩猟具製作に係る技術者の意匠が感得される。

番号	器形	胎土	色調			焼成	備考	出土遺構
			内面	外面	外面			
1	深鉢(粗製)	砂粒を多く含む		にぶい褐色		軟質	内外面調整不明	S B01
2	浅鉢(精製)	*	黒褐色	にぶい褐色	やや軟質		永井Ⅱ式	S K004
3	*	1-2mm大の小石を多く含む	黒褐色	にぶい褐色	*		永井Ⅱ式	S K006
4	深鉢(粗製)	細良	明褐色	褐色	*		岩田Ⅳ類、外面条痕	I地区表採
5	*	1-2mm大の小石を多く含む		にぶい黄褐色		軟質	内外面調整不明	S B04
6	*	1mm程度の小石を多く含む	褐色	褐色	やや軟質		内外面ナテ調整	S K118
7	浅鉢(精製)	0.5-2mmの小石を多く含む	にぶい褐色	にぶい褐色	軟質		口縁端部に磨研痕	S K096
8	深鉢(粗製)	粗砂粒を多く含む	暗赤褐色	にぶい赤褐色	やや軟質		内面ナテ、外面条痕	S K140
9	*	1-2mm大の小石を多く含む	褐色	にぶい黄褐色	軟質		内面ナテ、外面条痕	S K089
10	浅鉢(精製)	砂粒を多く含む	灰黄褐色	黒色	やや軟質		内外面磨研	S P23
11	深鉢(粗製)	1-3mm大の小石を多く含む	黒色	黒褐色	軟質		内面に横方向の条痕	S K096
12	*	*	黒褐色	褐色	*		外面条痕、内面不明	S K139
13	浅鉢(精製)	砂粒を多く含む	黒褐色	にぶい黄褐色	やや軟質		内外面磨研	S P21
14	深鉢(粗製)	2-3mm大の小石を多く含む		にぶい黄褐色		軟質	外面条痕、内面不明	S P26
15	浅鉢(精製)	砂粒を多く含む	黒褐色	にぶい黄褐色	やや軟質		貫用、波状口縁	S P31
16	深鉢(粗製)	2-3mm大の小石を少量含む	褐色	にぶい褐色	軟質		内外面ナテ	S P27
17	*	*	黒褐色	黒褐色	*		外面に横方向の条痕	S P15
18	*	*	黒褐色	明赤褐色	*		内面ナテ、外面条痕	*
19	*	砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	やや軟質		内面磨研、外面条痕	S P20
20	*	1-2mm大の小石を多く含む	黄灰色	にぶい黄褐色	軟質		口縁部外面に煮焙痕	S P32
21	*	*	暗灰色	にぶい黄褐色	*		内面ナテ、外面不明	S P33
22	*	粗砂粒を多く含む	黄灰色	にぶい黄褐色	*		岩田Ⅳ類、巻貝施文	S P30
23	*	2-3mm大の小石を多く含む	にぶい黄褐色	褐色	*		底部片、調整不明	S P24
24	深鉢(早期)	1-2mm大の小石を含む	浅黄色	にぶい褐色	*		上堀万Ⅱ類、黒赤文	II地区表採
25	深鉢(前期)	砂粒を多く含む	黒褐色	にぶい黄褐色	やや軟質		磯の森式、爪形文	*
26	浅鉢(精製)	砂粒を少量含む	褐色	にぶい黄褐色	*		内外面磨研、凹線	*
27	*	細良	黒褐色	黒褐色	*		内外面磨研、凹線	*
28	*	細砂粒を少量含む	黒褐色	灰褐色	*		口縁部外周に凹線	*
29	*	粗砂粒を多く含む	にぶい褐色	褐色	軟質		永井Ⅱ式	*
30	*	砂粒を多く含む	黒色	黒色	やや軟質		内外面磨研、凹線	*
31	*	細良	褐色	明赤褐色	*		内外面磨研、凹線	*
32	*	2-3mm大の小石を多く含む	褐色	褐色	*		岩田Ⅳ類、波状口縁	*
33	*	粗砂粒を多く含む	黒褐色	褐色	軟質		内外面磨研	*
34	*	細良	黒褐色	灰黄褐色	やや軟質		胴部片	*
35	深鉢(粗製)	2-3mm大の小石を多く含む	にぶい黄褐色	褐色	軟質		内外面調整不明	*
36	*	*	黒褐色	にぶい赤褐色	やや軟質		内面磨研、外面条痕	*
37	*	*	灰褐色	にぶい黄褐色	軟質		内外面調整不明	*
38	*	砂粒を多く含む	黒褐色	灰褐色	やや軟質		内面磨研、外面不明	*
39	*	細良	黒褐色	褐色	*		内面磨研、外面条痕	*
40	*	砂粒を多く含む	灰褐色	にぶい褐色	軟質		岩田Ⅳ類	*
41	*	粗砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	*		内外面調整不明	*
42	*	*	灰黄褐色	にぶい褐色	*		内面磨研、外面不明	*
43	*	*	オリーブ黒色	褐色	*		内面磨研、外面条痕	*
44	*	*	黒褐色	褐色	*		内外面調整不明	*
45	*	砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	褐色	やや軟質		岩田Ⅳ類	*
46	*	*	褐色	褐色	軟質		底部片、調整不明	*
47	*	粗砂粒を多く含む	にぶい黄褐色	褐色	*		底部片、外面条痕	*
48	*	2-3mm大の小石を多く含む	灰黄色	にぶい黄褐色	*		底部片、調整不明	*

第3表 縄文土器観察表



**台形縁石器** 120の正面左側面は正面側からの1枚の剥離面、右側面は主要剥離両面からのプランティング状の3枚の剥離面によって構成される急角度の切断面をもつ。基部側の剥離面の構成や刃部の形状から、ノッチドスクレイパーの可能性がある。母岩は打面を固定した両設打面の石核。

**石匙** 121は撮み部端で、刃部左右両端を欠損する。正裏両面の中央部付近に素材面を残す。刃部の調整加工は裏面に比べ正面は粗雑。撮み部の整形は裏面側にみられるように粗雑で、抉りはあまり顕著でない。

**石錐** 122は縦長剥片を素材とし、裏面側が主要剥離面。剥片作出後の調整加工である右側縁の3枚の剥離面によって、素材を変形させる。刃部は蝶番剥離で形成されるが、粗雑。

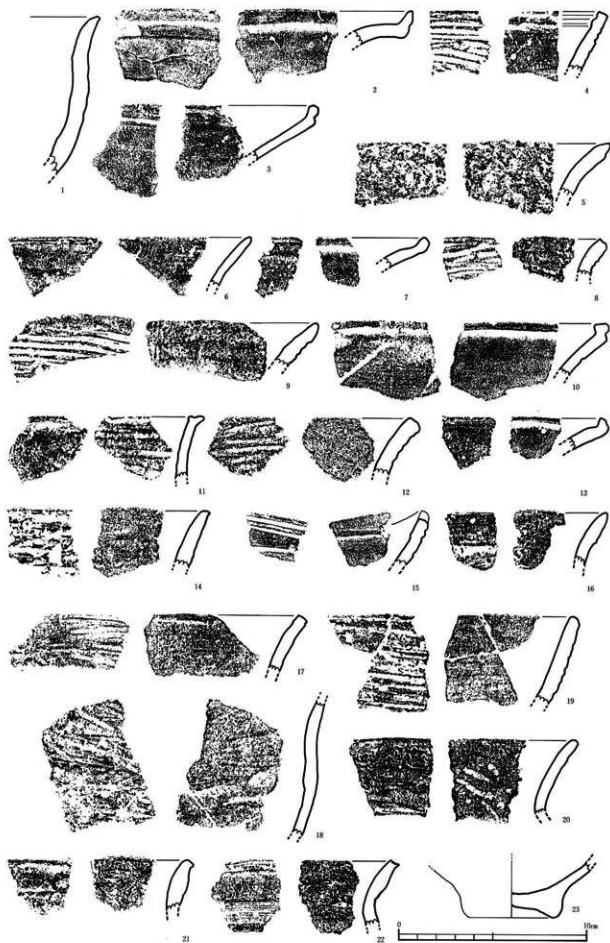
**掻器** 小・中形品がある。寸づまりの縦長剥片素材のもの(123・124・128・129・131)と横長剥片素材のもの(125・127・130)とがあるが、素材面を全く残さないほど調整加工が施されたもの(126)がある。素材作出時の打面は、単剥離打面のもの(123・130・131)、複剥離打面のもの(127・128)及び後上打撃に近いもの(124)などがある。弧状の刃部をもつものが多く、直線的な刃部をもつもの(127)も存在する。刃部は正面の下縁に造出されるもの(127・129)、下縁と左側縁に造出されるもの(124)、下縁と右側縁に造出されるもの(123・125)、下縁と左右両側縁に造出されるもの(131)、全周縁に造出されるもの(126・128・130)とがある。刃部の調整加工は、主要剥離面側からに限定されるもの(123・124・129・131)と両面からなされるもの(125～128・130)とがある。刃部の作出は大半が縁辺部への比較的浅い調整加工によってなされるが、急角度の調整加工により作出するもの(124・128・129)があり、素材中央部にまで及ぶ丁寧な調整加工を施すもの(130)もある。原礫面をもち対向剥離によるもの(131)も含まれている。

**楔形石器** 小形品で横長剥片素材のもの(132)と縦長剥片素材のもの(133・134)がある。いずれも上下両端の潰れ痕が顕著。切(折)断面は両側面(133)、裏面右側面(132)、左側縁(134)にもつものがあり、対向する剥離面は剥片作出後の調整加工である。

**二次加工のある剥片** 縦長剥片素材のもの(135・136・139)と横長剥片素材のもの(137・138)とがある。浅い角度の二次加工は、正面側から下縁に施すもの(137)、主要剥離面側から正面左側縁に施すもの(139)と左右両側縁に施すもの(135)、正裏両面からほぼ全周縁に施すもの(136・138)とがある。素材の高まりを調整加工によって除去する例(137)もある。(138)の素材の打面は、複剥離打面。他に1点同品がある。

**使用痕のある剥片** 横長剥片素材のもの(140)と、単剥離打面をもつ縦長剥片素材のもの(141・145)とがある。140の打面は裏面右上端部の剥離面で、素材除去後に正面上端部のやや広い剥離面を打点とする剥離によって素材の高まりを除去する。141は、正面左側縁に原礫面を有する。他に3点同品がある。

**ブランク** 143の目的剥片は、寸づまりで小形の縦長剥片。作業面を打面とし、打点を固定せず頻繁に転位。



第19図 縄文土器(1)

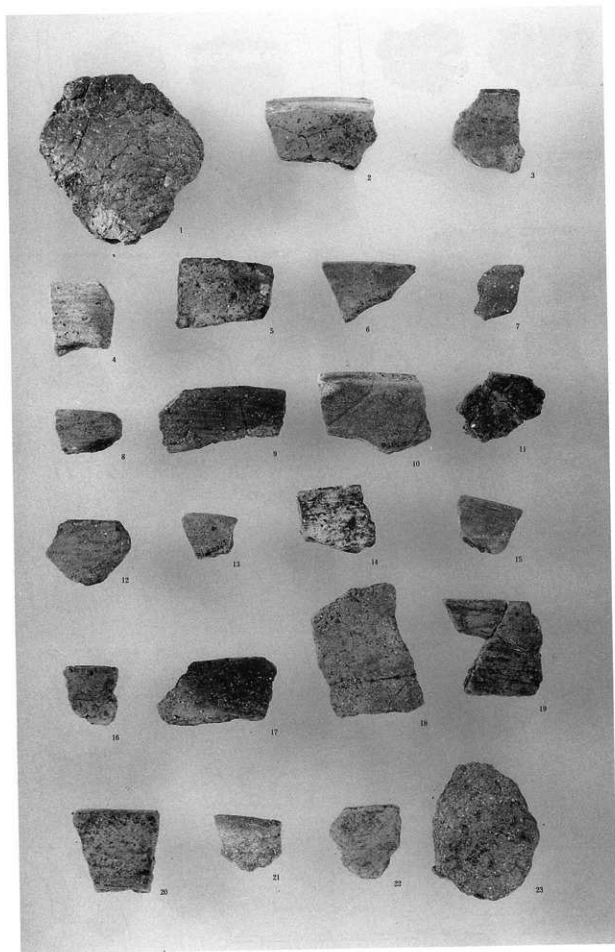
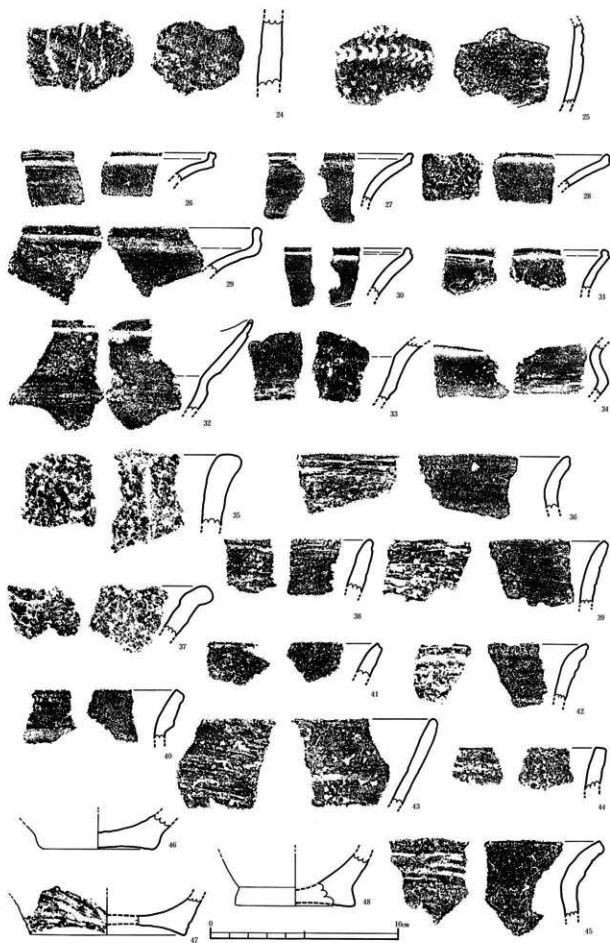


写真23 縄文土器(1)



第20図 縄文土器(2)

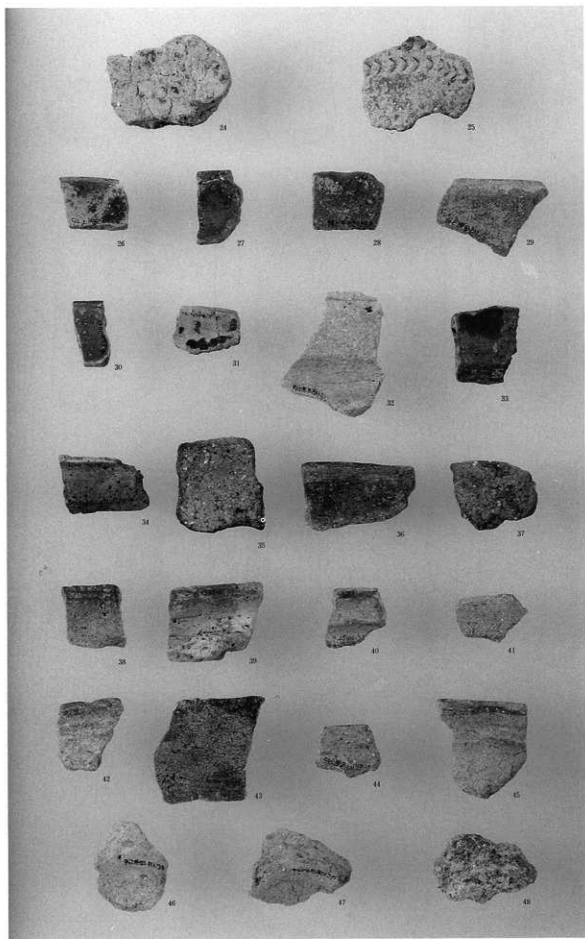
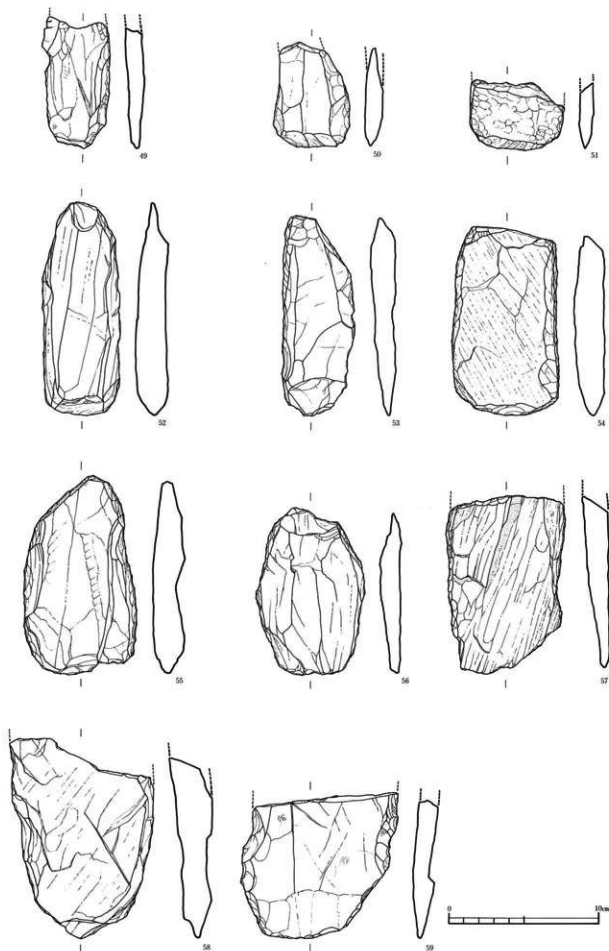


写真24 縄文土器(2)



第21图 打製石斧尖測圖

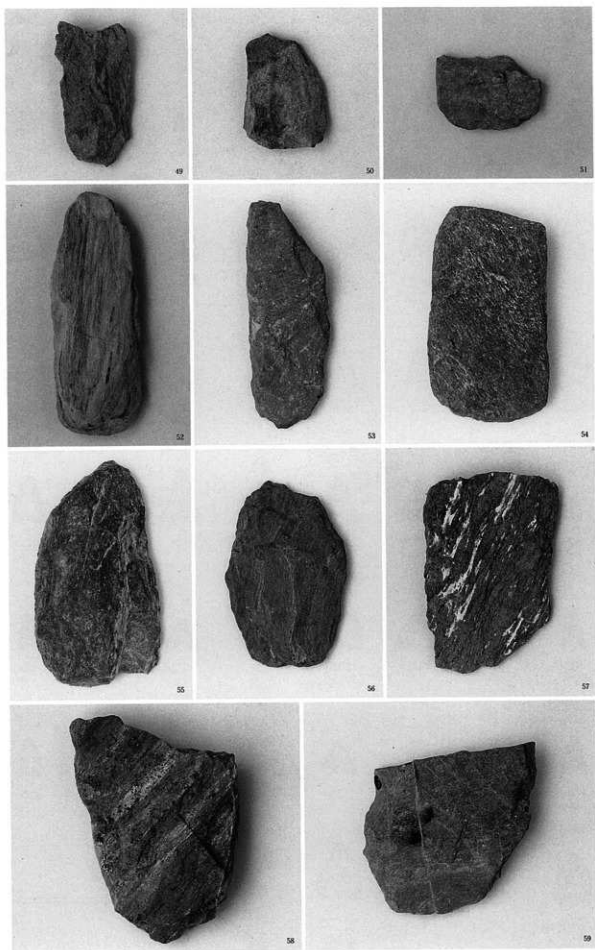
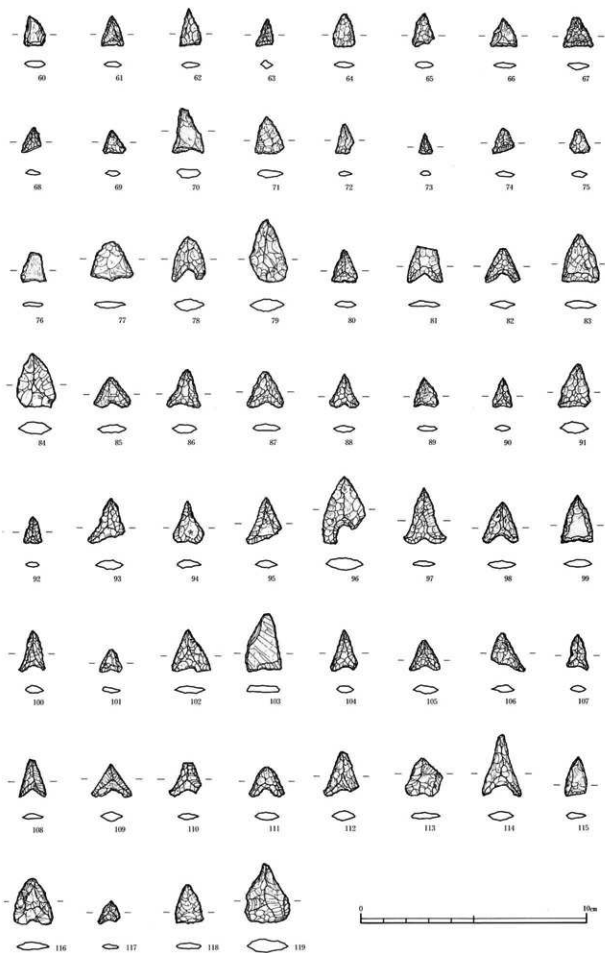


写真25 打製石斧



第22图 石铤实测图



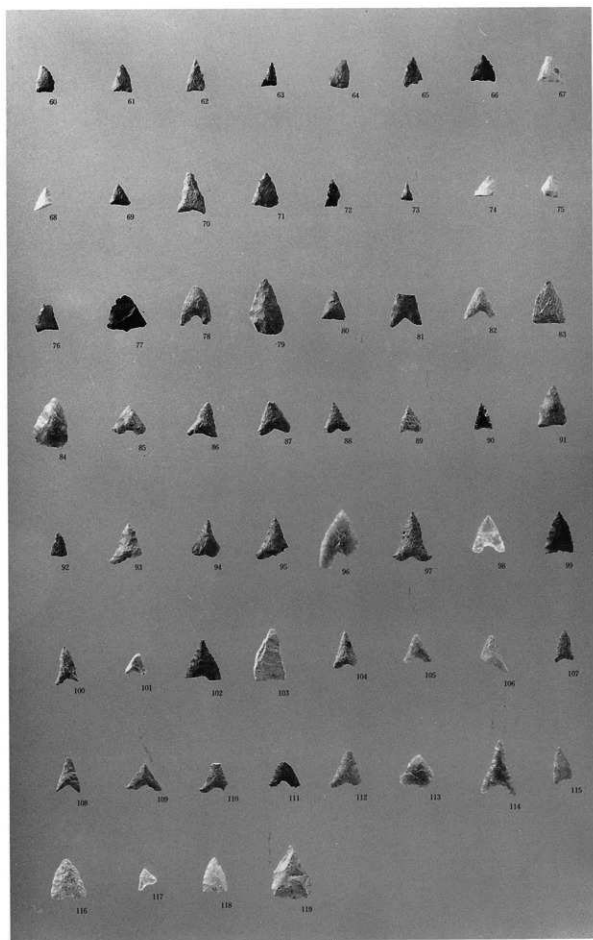
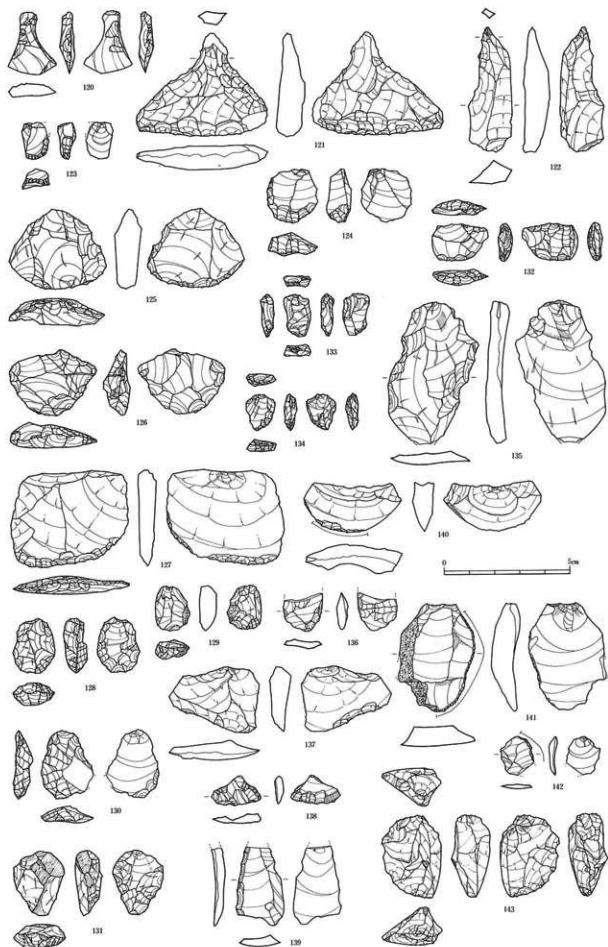


写真26 石蕨



第23図 その他の石器実測図

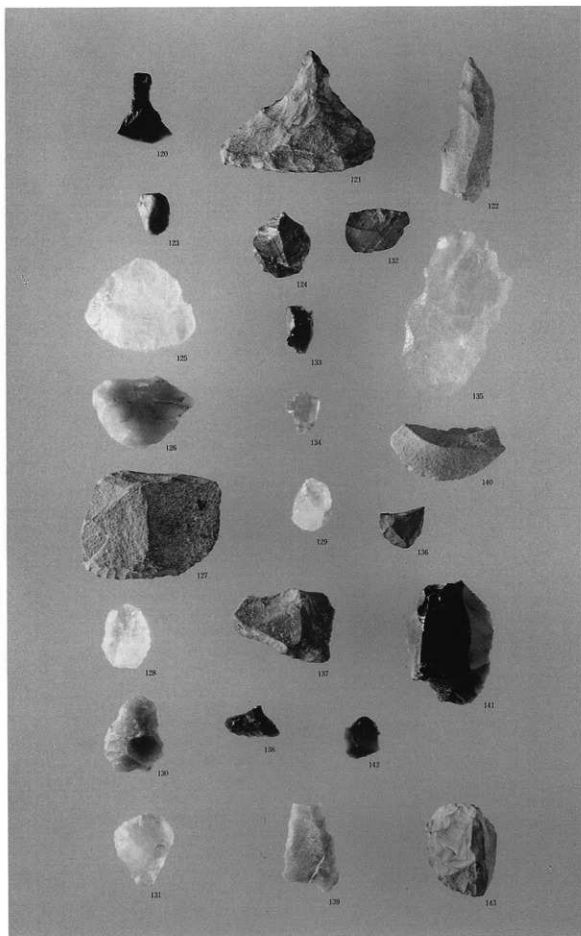


写真27 その他の石器

番号	種 別	法量(mm)／現存最大値			重 量 (g)	石 材	特 徴	出土遺構
		長さ	幅	厚さ				
49	打製石斧	88.0	41.0	12.0	66.20	塩基性片岩	短冊形。頭部欠。刃部はやや粗く片刃状に整形。	S P 30
50	*	70.5	50.5	12.0	63.90	泥質片岩	頭部の一部を接損。右側縁の整形刻離はやや雑。	Ⅲ地区表探
51	*	47.5	63.0	9.0	35.20	*	胴身部・刃部の破片。刃縁部の整形は丁寧。	S K 057
52	*	142.5	51.5	20.5	220.05	*	短冊形。完形。頭部の一部が刻離接損。	S P 28
53	*	133.5	49.0	16.0	144.35	塩基性片岩	短冊形。完形。刃部・側縁の整形は比較的丁寧。	Ⅱ地区表探
54	*	126.0	70.5	19.5	327.70	泥質片岩	完形。整形は全体的に丁寧。	*
55	*	132.5	74.5	20.1	275.10	*	刃部・側縁は細かな刻離を重ねて形成。	I地区表探
56	*	111.5	72.0	13.0	127.80	塩基性片岩	頭端部を欠くがほぼ完形。側縁部は細かな整形。	Ⅱ地区表探
57	*	119.0	79.0	16.5	195.90	泥質片岩	胴身部・刃部の破片。刃部・側縁は雑な整形。	*
58	*	133.0	95.5	24.0	445.50	*	胴身部・刃部の破片。刃部・側縁の整形は粗雑。	S K 134
59	*	96.5	104.0	13.5	199.10	塩基性片岩	胴身部・刃部の破片。基部右側縁の調整痕が顕著。	Ⅱ地区表探
60	石 鏃	13.5	9.5	3.0	0.35	赤色頁岩	平基式。完形。小型薄片を素材。やや粗い調整。	S B 01
61	*	13.0	9.5	2.0	0.20	*	平基式。完形。小形の薄片を素材とする。	*
62	*	16.0	9.5	2.5	0.20	安山岩	平基式。完形。側縁から交互刻離によって整形。	*
63	*	12.0	7.0	3.5	0.20	黒曜石	炬烏産石材。基部右側縁を欠失。横断面略菱形。	*
64	*	14.5	10.0	2.5	0.30	赤色頁岩	平基式。先端部・基部左側縁を欠く。調整丁寧。	*
65	*	15.0	10.0	3.0	0.35	黒曜石	炬烏産石材。雑な整形刻離で縁辺調整も粗い。	*
66	*	13.0	12.0	2.0	0.25	玄武岩	平基式。素材は扁平切片。交互刻離により整形。	*
67	*	13.0	13.5	3.0	0.45	凝灰岩	平基式。先端部欠失。両面に自然面を一部残す。	*
68	*	11.5	8.5	2.0	0.05	*	小形の薄片を素材とする。基部左半を欠失。	*
69	*	10.0	10.0	2.5	0.10	安山岩	ほぼ完形。基部左右側縁が外上方へ反る。	*
70	*	20.0	14.0	4.0	0.95	*	先端部欠失。基部の調整は雑。風化が著しい。	*
71	*	16.5	12.5	3.5	0.70	赤色頁岩	平基式。ほぼ完形。側縁の調整はやや雑。	*
72	*	13.5	7.0	2.0	0.10	黒曜石	炬烏産石材。先端部と基部左側縁を欠失。	*
73	*	9.5	6.5	2.0	0.05	安山岩	腰岳産石材。調整は全体的に微細で丁寧。	*
74	*	11.5	10.0	2.0	0.10	珪長岩	小形の薄片を素材とする。基部左半は粗い整形。	*
75	*	10.5	8.5	2.5	0.10	砂岩	基部右側縁を欠失。整形はやや粗雑な交互刻離。	*
76	*	13.0	11.0	1.5	0.15	赤色頁岩	小形薄片を素材。先端部欠。未製品とみられる。	*
77	*	17.5	19.0	2.5	1.30	泥岩	先端部を欠失する。調整は全体的に粗い。	*
78	*	20.0	15.0	5.0	1.10	安山岩	逆刺部右側縁を欠失。調整は全体的に丁寧。	S K 116
79	*	28.0	16.5	6.0	2.15	*	大形品。側縁から交互刻離により粗雑な整形。	S P 16
80	*	14.5	11.5	3.0	0.80	*	完形。側縁は微細な刻離によって調整。	S K 065
81	*	15.5	15.5	2.5	0.70	*	凹基式。先端部欠失。逆刺部の調整は丁寧。	*
82	*	15.0	15.5	3.5	0.40	黒曜石	炬烏産石材。先端部と逆刺部右側縁を欠失。	S D 03
83	*	21.0	16.5	3.5	1.10	珪質片岩	平基式。完形。整形は全体的に丁寧。	S P 28
84	*	23.5	17.0	5.0	2.10	黒曜石	炬烏産石材。側縁から交互刻離により整形。	S P 20
85	*	13.5	16.0	3.5	0.60	安山岩	完形。縁辺調整は微細で丁寧。	S P 25
86	*	17.5	15.0	4.0	0.70	*	微細な刻離により縁辺調整を施す。ほぼ完形。	S P 38
87	*	16.0	16.5	3.0	0.70	*	完形。整形・調整は全体的に丁寧。	S P 11
88	*	15.5	13.0	3.0	0.35	*	完形。先端部は鋭く、縁辺調整もきわめて丁寧。	S P 12
89	*	13.5	10.5	2.5	0.20	珪質片岩	ほぼ完形。基部左側縁はやや雑な整形。	I地区表探
90	*	13.5	9.0	2.5	0.15	黒曜石	炬烏産石材。微細な刻離により縁辺調整を施す。	*
91	*	19.5	14.5	5.0	1.15	安山岩	完形。素材は厚く、整形も全体的にやや粗雑。	*
92	*	12.0	7.0	2.0	0.05	*	完形。整形・調整ともに微細で丁寧。	*
93	*	20.0	16.0	3.5	0.70	*	凹基式。逆刺部右側縁を欠失。調整は丁寧。	Ⅱ地区表探
94	*	18.5	13.5	3.5	0.75	*	完形。中央部に平坦な刻離面をとどめる。	*
95	*	20.5	15.5	3.0	0.80	*	凹基式。逆刺部左側縁を欠失。やや雑な整形。	*
96	*	29.0	18.5	5.5	2.10	黒曜石	炬烏産石材を用いた大形品。逆刺部右側縁を欠失。	*

第4表 石器観察表(1)

番号	種 別	法量(mm)/現存最大値			重 量 (g)	石 材	特 徴	出 土 遺 構
		長 さ	幅	厚 さ				
97	*	24.5	19.0	2.5	1.05	安山岩	完形。逆刺部左右両端が外上方へ短く反る形状。	Ⅱ地区表探
98	*	18.5	15.5	3.5	0.80	水 晶	完形。整形・調整は全体的に丁寧。	*
99	*	21.5	14.0	3.0	0.90	安山岩	整形はやや雑。中央部に平坦な自然面を残す。	*
100	*	18.5	11.5	3.5	0.40	*	逆刺部右端を欠くがほぼ完形。整形はやや雑。	*
101	*	10.0	10.0	2.0	0.15	珪 長 岩	完形。小形薄片を素材とする。	*
102	*	19.0	17.0	3.0	0.75	安山岩	完形。逆刺部右側端の調整はやや粗い。	*
103	*	25.5	16.0	2.5	1.90	珪質片岩	素材は薄片。周縁の調整から未製品とみられる。	*
104	*	18.5	12.0	3.0	0.40	安山岩	逆刺部右側端を欠くがほぼ完形。丁寧な調整。	*
105	*	14.0	13.5	3.5	0.40	黒曜石	姫島産石材。整形・調整ともに微細で丁寧。	*
106	*	17.0	15.0	3.0	0.55	凝灰岩	逆刺部左側を欠失。中央部の整形はやや粗い。	*
107	*	16.0	10.0	2.5	0.20	安山岩	逆刺部右側はややいびつな整形。ほぼ完形。	*
108	*	16.5	12.0	2.0	0.35	珪質片岩	先端部を欠失。逆刺部の調整はとくに丁寧。	*
109	*	15.0	17.5	4.0	0.50	安山岩	整形・調整は微細で丁寧。横断面は略菱形。	*
110	*	15.0	14.5	2.5	0.35	*	先端部と逆刺部右側を欠失。調整はやや粗い。	*
111	*	13.5	15.5	3.5	0.40	玄武岩	弧状に整形した先端部が特徴的。調整は細やか。	S P 17
112	*	20.0	15.5	4.0	1.00	安山岩	逆刺部右側を欠失。整形・調整は全体的に丁寧。	Ⅱ地区表探
113	*	17.0	16.0	2.5	0.90	黒曜石	姫島産石材。整形は雑で、基部右側が特に顕著。	*
114	*	27.5	17.0	4.5	1.10	*	姫島産石材。大形品で、逆刺部両端は鋭く作出。	*
115	*	17.5	9.5	3.0	0.40	安山岩	平基式。完形。小型薄片を素材。やや粗い調整。	*
116	*	20.0	17.0	3.5	1.10	珪質片岩	完形。整形・調整ともやや粗い。	*
117	*	10.5	10.0	2.0	0.10	水 晶	逆刺部右側端を欠失。整形・調整は全体的に雑。	*
118	*	17.5	12.5	2.5	0.45	凝灰岩	平基式。完形。整形は全体的に丁寧。	*
119	*	26.5	20.0	5.5	3.10	*	大形品。お厚い素材で、粗い調整を施す。	Ⅲ地区表探
120	台形鎌石器	25.0	19.0	6.0	1.60	黒曜石	腰岳産石材。正面左右両側面の切断面は急角度。	Ⅱ地区表探
121	石 匙	40.5	52.5	10.0	18.20	安山岩	刃部正面は複雑な調整加工。握み部の整形は雑。	*
122	石 鎌	49.5	17.5	10.5	6.60	*	素材は縦長切片。刃部は複雑な燧番割で形成。	*
123	挿 器	14.5	11.0	7.5	0.90	黒曜石	姫島産石材。下縁部は弧状で丁寧な調整加工。	S B 01
124	*	21.0	20.0	10.0	3.20	*	腰岳産石材。切片作出時の打面は極めて狭い。	*
125	*	31.5	38.5	10.0	11.70	水 晶	弧状の刃部をもつが、調整加工の割離面は狭い。	Ⅱ地区表探
126	*	26.0	34.5	10.5	8.00	チャート	ほぼ全周縁部に正裏両面からの調整加工を施す。	*
127	*	38.5	47.0	8.5	12.40	安山岩	扁平幅広の横長切片を素材とする。	S P 34
128	*	22.0	17.0	9.0	3.25	水 晶	裏面中央に素材面残存。ほぼ全周縁に調整加工。	Ⅱ地区表探
129	*	18.0	14.0	7.0	1.70	*	正裏両面上縁部に調整加工を施す。刃部は弧状。	S B 01
130	*	27.5	21.0	6.0	2.85	黒曜石	姫島産石材。打面は狭い単割離の平坦打面。	Ⅰ地区表探
131	*	25.5	20.0	10.5	4.80	水 晶	正面一部に原表面残存。打面は狭い単割離打面。	Ⅱ地区表探
132	楔形石器	15.0	22.5	5.5	2.05	赤色頁岩	調整加工により正面左上半部に大きな割離面。	*
133	*	17.0	10.5	5.0	0.60	黒曜石	腰岳産石材。上下両縁に刃落れ顕著。	Ⅰ地区表探
134	*	14.5	11.5	5.0	0.75	水 晶	裏面左側面は切断面、右側面は調整加工を施す。	S B 01
135	剥 片	57.0	36.5	6.5	12.80	*	二次加工のある切片。裏面側に傾く複割離打面。	Ⅱ地区表探
136	*	15.0	15.5	4.5	0.65	赤色頁岩	下縁を除く左右両側縁に二次加工を施す。	S B 01
137	*	26.0	36.0	8.5	5.20	安山岩	石材はハリ質安山岩。下縁部に二次加工あり。	Ⅲ地区表探
138	*	11.5	19.5	3.5	0.35	黒曜石	腰岳産石材。左右両側縁に切断面。二次加工。	Ⅱ地区表探
139	*	31.5	19.5	4.0	1.60	*	姫島産石材。正面左側縁に裏面側から二次加工。	S K 140
140	*	20.0	38.5	8.0	5.75	安山岩	使用痕のある切片。素材は横長切片。刃部弧状。	Ⅱ地区表探
141	*	43.0	31.5	8.0	11.25	黒曜石	腰岳産石材。正面右側縁に連続する微細割離痕。	*
142	*	15.5	13.0	3.5	0.25	*	腰岳産石材。狭い単割離平坦打面。使用痕あり。	*
143	ブランク	33.0	24.0	14.0	10.40	安山岩	打面を固定せず頻りに転位して作出。	S K 087

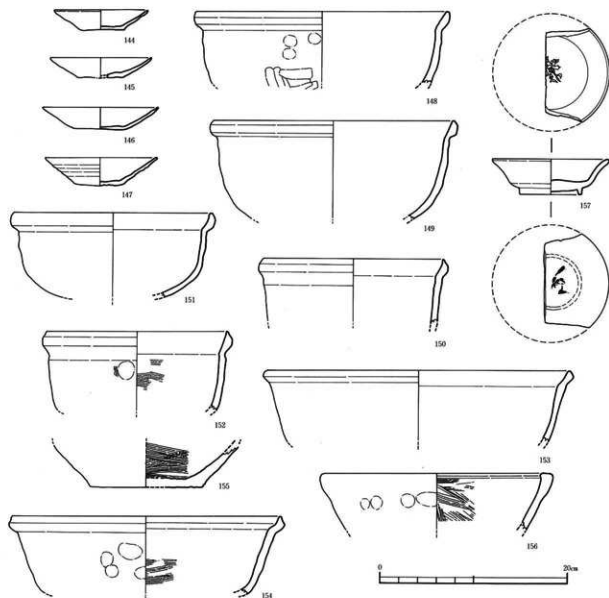
第5表 石器観察表(2)

## 室町時代

### 1 土器 (第24・25図、写真28・29)

土師器・瓦質土器・磁器などが出土したが、土師器・瓦質土器が大半を占める。3基の土坑から14世紀の土師器がみとめられたが、多くは15～16世紀のものである。

**土師器** 坏と皿があるが、量的には皿が多い。坏 (158～161) はいずれも14世紀のものと考えられ、砂粒を含む橙色。158・159の体部は直線的に外方向へ開き、口縁端部は尖りぎみ。内外面ともナデ調整、底部糸切り。159の外面上には煤が付着。161の体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。158・160はS K 114、159はS K 088から出土、161はⅡ地区で表面採集。皿のうち162～164は口径7.0cm、器高1.0cm前後と比較的浅い小皿で、器壁は厚い。内外面ともナデ調整、底部糸切り。橙色で砂粒を多く含む。162・163はS K 114、164はS K 123から出土。144～147、165～168は、口径9.9cm～12.1cm、器高2.0～3.0cm。器壁は総じて薄く、体部は直線的に外方向へ開く。口縁端部は尖りぎみ。内外面ともナデ調整、底部は糸切り後ナデ、146・147には板目痕が残る。灰白色で砂粒を多く含む。144・145・146はS P 03・06・08、147はS D 01、165・166・167はS P 19・14・13からそれぞれ出土。



第24図 I地区出土土器実測図

169は表面採集。15～16世紀の皿。

**瓦質土器** 鍋・足鍋・こね鉢・すり鉢が出土した。148～153、174は鍋、170・171は足鍋。口縁は短く上方に伸び、やや内湾する。15～16世紀の所産。底部欠損品がほとんどであり、鍋の中には足鍋の可能性もあるものも含まれる(148)。148は外面に、へら状工具によるナデ、指圧痕がみとめられる。148～150はS D 01、151はS K 002から出土。152・154は、内面ハケ調整の後ナデ、外面指圧痕。152はS P 04、154はS K 045から出土。153はS K 17から出土。170はS P 36、171はS P 13から出土。いずれも底部に格子叩き痕がある。174はⅡ地区で表面採集。169は16世紀以降のもので、口縁は緩やかに内湾した後短く外に開く。S P 35から出土。155はこね鉢の底部。内面はハケ調整、外面はハケ後ナデ調整、底部に板目痕を残す。S K 045から出土。156・173～175はすり鉢で内面に卸目を施す。156・173・175の口縁は、上面平坦で肥厚し端部を内に曲げる。156はS K 017、173はS D 04、174はS P 10からそれぞれ出土。175はⅡ地区で表面採集。

**磁器** 中国南方系(竜泉窯系か)の青磁皿で、S P 04から出土。高台は削りだして、焼成堅緻。内底にはスタンプ(花卉文)を施す。オリブ灰色の施釉で、畳付きから高台内面は露胎する。高台内面

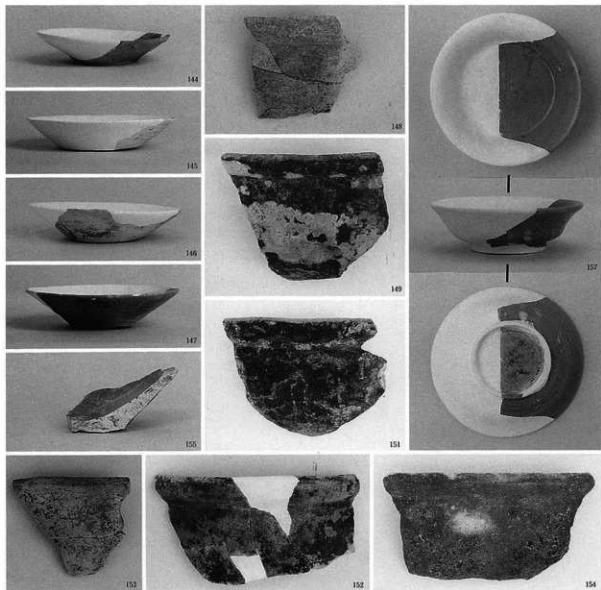


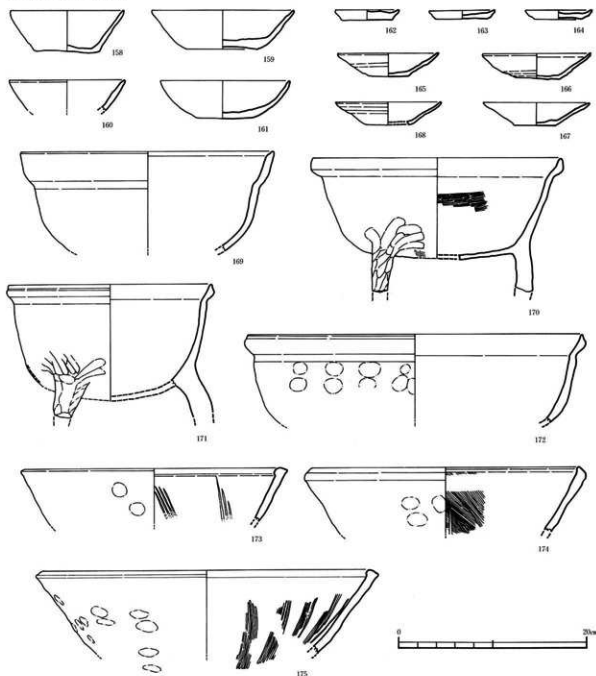
写真28 I地区出土土器

に文字様の墨書がみとめられるが、判読できない。墨書の上から漆で絵取る。15世紀の所産。

## 2 土製品・石製品 (第26図・写真30)

**釉羽口** 2点出土した。179は高熱を受けた痕跡がないことから吹き口に近い部分と思われる。S P 08から出土。180は、高熱を受け焼け締まっていることから、先端火口部片であろう。胎土に植物繊維を含む。S K 088からスラグとともに出土。

**石鍋** 176-178は口縁端下位に断面台形の銜をもつ石鍋片。口縁部の1/4が残存、底部は欠失する。ノミ状加工具で整形され、内面及び銜より上位は研磨が施されている。176・177には銜から下位にかけて煤が付着。176は滑石製でS P 01から出土、177は凝灰岩製でS P 09から出土した。178はⅡ地区での表面採集である。



第25図 Ⅱ地区出土土器実測図



### 3 金属製品 (第26図・写真30)

**鉄器** 181・183は鉄釘。釘の頭は短く折り曲げ、断面長方形。181は全長3.2cm、Ⅲ地区での表面採集品である。183は、残存長3.3cmで、S K 045から出土した。182はS K 114から出土、錆化が著しいが、鉄釘になるか。184は全長6.0cmの楔状の鉄製品。S P 02から出土したが、用途は不明。185はS P 07出土の雁股式鉄鎌。錆化が著しく刃部先端を欠損する。残存長は8.1cm、S P 07から出土した。186はS P 18から出土した刀子で刃部先端を欠損する。関が両側に存在する「両関造り」であるが、刃部側の関はなだらかである。茎部に目釘穴が1箇所存在する。残存長14.0cm、茎部の長さ7.1cmを測る。

**銅銭** 187はS P 05から出土した「嘉祐元宝」で、2/5を欠損する。188はS P 22出土の「政和通宝」。189はⅡ地区で表面採集した「開元通宝」。

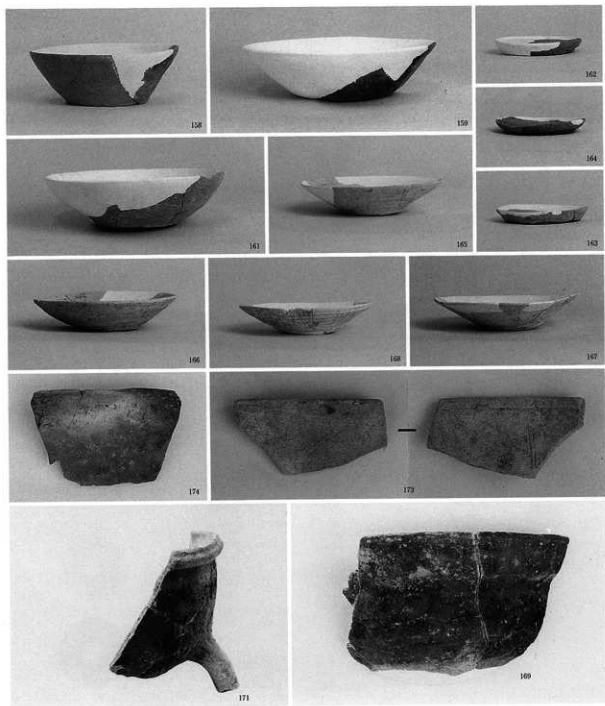
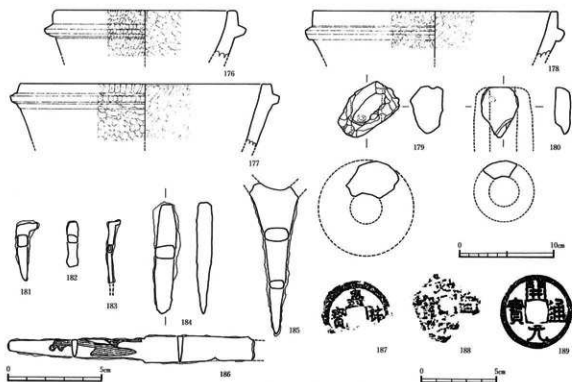


写真29 Ⅱ地区出土土器



第26图 土製品・石製品・金属製品

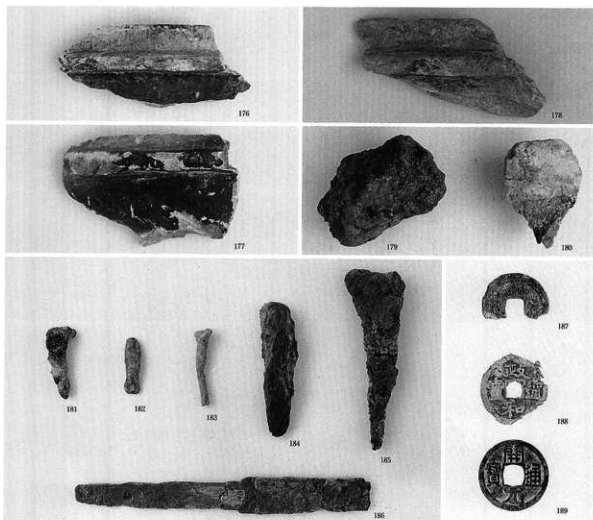


写真30 土製品・石製品・金属製品

## ▲ V ま と め

### 調査成果

営宮は場整備事業施行に先立つ埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査で新たに確認した本遺跡は、地名を冠し上原田遺跡と名付けられた。当該事前調査の結果を踏まえ行った発掘過程で姿を現した遺跡は、規模・内容ともに最初の予想をはるかに超えるものであった。縄文時代と中世室町時代に営まれたこれらの集落関係遺構群に係る調査面積は約7,850㎡。県農林部局との調整により盛土工法で掘削回避を図った水田部分を含めると、遺跡の拡がりは実に40,000㎡以上に及ぶ。限られた時間と予算の中で行う調査の主目的は、遺跡の記録保存と規模・性格の把握である。記録的な猛暑も手伝って困窮を極めた現地調査で得たものは、従来不明点の多かった防長縄文土器文化の解明に寄与すべき貴重な資料である。以下、調査成果を簡潔に整理し、まとめたい。

### 縄文時代

**集落** 県西域内陸部屈指の秀峰荒滝山麓に広がる吉部盆地。その南端は、京岡堂山から派生する小起伏丘陵地形で閉塞される。厚東川支流の藤ヶ瀬川流域に拓かれた大棚と、西方にこれと向対する長谷の両地区間を隔絶する比高約15～20mのこの砂礫層丘陵上（標高約96m）に本遺跡が所在する。盆地を俯瞰する好立地と透水性に富む乾燥質の土壌、崖下の豊潤な水系など恵まれた自然条件は、農耕と狩猟主体の縄文人にとって快適な居住環境であったに相違ない。この丘陵上で採集した土器（捺糸文土器・瓜形文土器）や石器（台形様石器など）は、彼らの生活の初現を縄文時代早～前期、或いはそれ以前とする時期想定を可能たらしめるが、遺憾ながら今回の調査で同時期の遺構は検出されていない。従って、複数の住居や土坑などで以て構成される集落の実在を証明し得るのは、遺構・遺物を確認した縄文時代晩期のこと。併せて、集落の存続は出土遺物の大部分をなす土器の年代幅から、晩期前半を盛期とする前後の期間に比定できる。

集落は堅穴住居と土坑を基本に構成され、性格不明の住居状遺構や溝状遺構がこれに加わる。検出した住居は4軒（Ⅰ地区1軒・Ⅱ地区3軒）と少なく、集落の全体構造の解明までは至らないが、住居を中心として周辺に土坑が不規則に群集するパターンが看取れないでもない。土坑の用途は、食料貯蔵や不用品投棄など。とりわけ炭化木・焼土を多量に含むS K 075やS K 131は、炬を備えない住居の屋外施設を考察する上で注目すべき遺構である。なお、Ⅰ～Ⅱ地区間の未調査部分については、現状地貌から同様遺構の埋存が充分想定できる。よって、このエリアを含め集落は丘陵上のほぼ全域に拡散することは明白で、住居数も総計十数基以上に及ぶとみて良からう。また、Ⅲ地区は遺構分布が空洞化し、反面、風倒木痕の密集が顕著となる。このことは丘陵端に近い地形の制約を受けた集落の南限域に当たるとを示すと同時に、狩猟・採集の拠点集落として最適な樹木繁茂する自然環境が展開していたことを裏付けているといえよう。

**堅穴住居** 平面形は、円形又は楕円形。規模は長軸268～402cm、短軸159～324cm。内部は主柱穴5～6本で構築され、周壁の内側に排水溝を巡らすもの（S B 02・S B 03）もある。蛇足ながら、床面積（4～9㎡）からみて1軒当たりの居住可能人数は3～5人程度と推算できよう。特筆すべきは、S B 01内での遺物出土状況である。床全面に散乱した未成品を含む石器と石材剥片、並びにその内側に

央部をさらに一段掘り下げて設置した工作台とみられる大礫3個は、ここでの石器製作の様相を如実に伝えるものである。いずれにしても、これらは神田遺跡(下関市)・月崎遺跡(宇部市)・岩田遺跡(平生町)など本遺跡とはほぼ同時期に属する県内の主要縄文遺跡の調査前例において未確認となっていた住居の基本構造とその性格の一端を明示する貴重な資料となり得るものである。

**縄文土器** 本遺跡最古のものは、Ⅱ地区の中央部東寄りの位置で採集した燃糸文土器(第20図24)。早期の深鉢胴部片で、器壁の厚さは約12mm。内面はナデ、外面の施文は縦線で0段と燃り。類例として上福万遺跡(米子市)Ⅱ類A種や柏原遺跡群(福岡市)B-2類などがあげられるが、本遺跡出土のものは前者の特徴により近い。前期の爪形文土器(第20図25)は、Ⅱ地区のほぼ中央部で採集。深鉢の胴部片で、器壁は厚さ6mm。やや大きめのD字形の爪形を垂直に押し当てた施文は、帝釈観音堂洞遺跡(広島県神石町)Ⅳ類や磯の森貝塚(岡山県粒江町)出土品などに共通点があるが、外面に条痕をみとめない本例の特徴は後者に近似するといえよう。燃糸文土器と爪形文土器はわずか1点ずつの採集で共に遺構に伴うものではないが、本遺跡の開発が縄文早～前期に遡り得る手掛かりとなるととどまらず、県内外近隣一帯での例数も希少である点を加味し、早～前期縄文世界の復原におけるその取り扱いに一層慎重を期さねばならないであろう。

出土した縄文土器の大半は晩期のもので、精製土器と粗製土器に分別される。量的にみて晩期前半に属する粗製の鉢が他を凌駕し、浅鉢と深鉢で以て基本的な組み合わせを成している。精製浅鉢の中には貫川遺跡(北九州市)出土品に酷似する波状口縁を有するもの(第19図15)、口縁部に凹縁をもつ永井遺跡(善通寺市)Ⅲ式土器と共通点を有するもの(第20図29)などが含まれる。他方、その主体をなす口縁部から底部にかかる器形的特徴や器壁内外面の調整手法などの諸特徴は、概ね岩田遺跡出土土器(岩田Ⅳ類)に類似して同時期(縄文晩期前半)に包括されるものとみて良く、両遺跡における土器製作技術系譜の関連性が注視される。

縄文土器自体、元来瀬戸内沿岸部に偏りがちで、内陸部での発掘調査による一括事例は、吉部盆地の北東方向約10kmに位置し、同じ厚東川水系になる長田川中流域の立石遺跡(美東町)での出土品を含めごく限定されている。その意味で本遺跡出土のものは向後、当該盆地を含めた県内内陸地における縄文時代集落の展開プロセスの実態を解明して行く上での基礎資料となろう。

**石器** 扁平打製石斧は多くが折損品で、完形出土品は少量。遺構出土のものはわずかで、その多くは広い範囲に散在して採集。伴出土器から縄文時代晩期のものであることは明らかで、集落縁辺で使用された土掘具の一種と考えられる。丘陵上を拓いて営まれた農耕の存在を間接的に示証する資料である。同じく厚東川水系の最上流部に当たる国秀遺跡(秋芳町)出土の同種石器とともに、縄文時代晩期の農耕具の実相に係る検討が必要となろう。

石鏃は、本遺跡出土石器の中で最多で、形態・法量とも多種多様。形態はすべて無茎式で、基部の形状を指準に平基式と凹基式に分けられる。就中、注目すべきは、逆刺部両端を外上方に短く反らせて作出する形態の石鏃である。特に第21図の97は完形品で、サヌカイトを微細丁寧に加工・調整しており、高度に熟成された当時の製作技術を知るに充分である。岩田遺跡に同形石鏃の前例があり、土器と併せて両地の交易を考察する上で興味深い。

## 室町時代

縄文時代以後、永い時の流れを経てこの丘陵上が人々の生活の主舞台として再び蘇るのは、室町時代のことである。この時代の集落関連遺構は、調査地区のほぼ全域から検出。復元し得た掘立柱建物は合計11棟である。個々に多少のばらつきがあるものの、凡そ北東-南西と北西-南東に棟方向を揃えたグループを把握できよう。検出した建物群の時期決定については伴出遺物が量的に乏しく困難であるが、土師器などから15-16世紀頃とみて大過なからう。集落の範囲は地形的観点を踏まえ、その大部分が丘陵上の調査地区内におさまっていると判断でき、さらにその一部が南方に延びて下市遺跡に至っているとみて良からう。これら建物の分布状況や立地条件などから、一連の建物群は農耕などの生活上利便な藤ヶ瀬川に近接した低丘陵地を選定して形成された単位集落を見做される。本遺跡の南方方向約1kmにある下市遺跡を加えて、県内における同時期の集落関連建物と対比して建物の規模・構造はほぼ同じく、分布密度などからみても当時の一般の様相をとどめる集落であったといえよう。

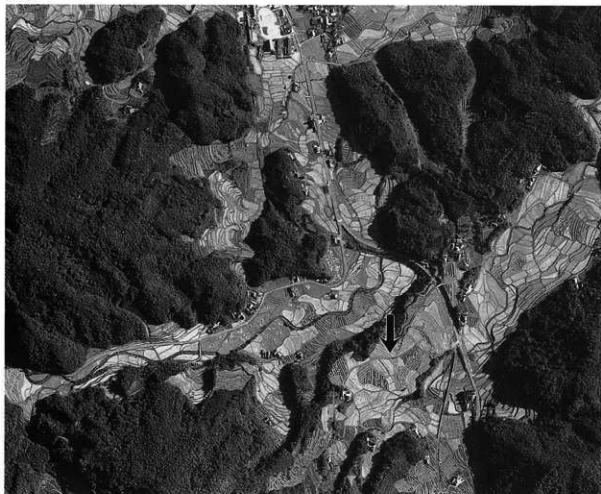
## 結語

今回の発掘調査の結果、吉部盆地南端に張り出す低丘陵上における史の変遷の実態が明かされた。縄文時代早-前期に始まる人々の営為は、晩期にその盛期を迎える。後続する弥生時代から古代までおそらく山野の深い緑のバールに包まれていたであろうその静かな地貌は、室町時代の集落形成とともに一変した。近世に至るや地元有志の英知により崖下を流れる藤ヶ瀬川上流より約2kmにわたる水路の敷設を待って大規模な水田開発が進展し、現今の広き圃地帯を現出したのであろう。長閑なその景観は、さらに農業の効率向上を謳うほ場整備施策の一環としての工事を経て、機能的かつ近代的な姿に生まれ変わろうとしている。

## 参考文献

- (1) 瀬見 浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18巻、広島大学、1960年
- (2) 瀬見 浩「宇部の縄文文化-月崎遺跡の縄文式土器について-」『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年
- (3) 小野忠照ほか『神田遺跡』1-2、山口県教育委員会、1971-72年
- (4) 宇多村 謙ほか『土地分類基本調査』小郡、山口県企画部、1972年
- (5) 渡辺 誠『壱岐下遺跡発掘調査報告書』平安博物館、1975年
- (6) 山本一朗『山口県先史時代採掘遺物集成ならびに編年の研究』、福岡考古学研究所、1978年
- (7) 長岡光展ほか『上福万遺跡』、財団法人鳥取県教育文化財団、1985年
- (8) 瀬見 浩ほか『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅱ、広島大学、1985年
- (9) 島田貞彦『備前国児島郡磯の森貝塚特に爪形紋土器に就て』『考古学雑誌』第14巻、日本考古学会、1924年
- (10) 山崎純男ほか『柏原遺跡群』Ⅴ、福岡市教育委員会、1987年
- (11) 兼安和二三ほか『立石遺跡』、山口県教育委員会、1988年
- (12) 小方泰宏ほか『貫川遺跡』1-5、財団法人北九州市教育文化事業団、1988-92年
- (13) 岩崎仁志ほか『国秀遺跡』、山口県教育委員会、1992年
- (14) 白岡 太ほか『下市遺跡』、山口県教育委員会、1994年

図版 1



南上空から吉部盆地南部を見下ろす（↓上原田遺跡）



調査区近景（東から）



I 地区全景



III 地区全景



II 地区全景

図版 3



調査前



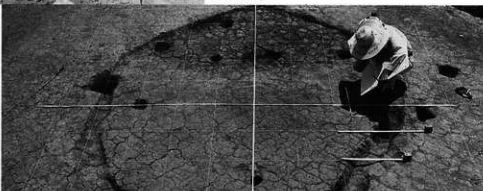
重機による表土除去



遺構検出



遺構掘り込み

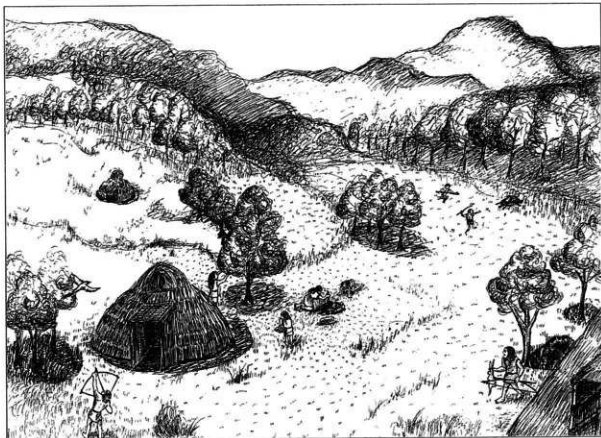


遺構実測



現地説明会





第27図 縄文時代の上原田（想像図）



① 竪穴を掘る



② 骨組みをつくる



③ カヤでふく



④ 完成

竪穴住居復元

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かみはらんだいせき
書名	上原田遺跡
副書名	平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第176集
編著者名	西岡義貴・白岡 太・井上広之・河村吉行
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753 山口県山口市春日町3-22 Ⅸ0839-23-1060
発行年月日	西暦1995年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみはらんだ 上原田	あまぐさぐすのまち 厚狭郡 楠町 おおみずのしきまべ 大字 東吉部	35421		34度 6分 36秒	131度 16分 39秒	19940426～ 19941016	7,850	ほ場整備 事業に伴 う発掘調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上原田	集落跡	縄文時代	竪穴住居 4軒 住居状遺構 1基 土坑 39基 溝状遺構 21条	縄文土器 石器	縄文時代晩期 と室町時代の 集落
		室町時代	掘立柱建物 11棟 土坑 26基 溝状遺構 21条	土師器、瓦質土器 輸入磁器、土製品 石製品、鉄製品 銅銭	



---

山口県埋蔵文化財調査報告第176集

上原田遺跡

— 平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

1995年 3月

編集 財団法人山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県埋蔵文化財センター

(山口市春日町3-22)

発行 財団法人山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県教育委員会

(山口市滝町1-1)

印刷 泉菊印刷株式会社

(下関市長府扇町8-48)

